青森県埋蔵文化財調査報告書　第216集

近野遺跡 V

－県総合運動公園拡張整備事業に伴う遺跡試掘調査報告－

１９９７年3月

青森県教育委員会

序

青森市には、三内丸山遺跡・小牧野遺跡をはじめとした貴重な歴史的遺産が包蔵されています。青森県教育委員会は、平成６年度及び７年度に県総合運動公園拡張整備事業に伴い、近野遺跡の試掘調査を実施しました。

今回の調査の結果、本遺跡は縄文時代中期と、平安時代の集落遺跡であることが判明しました。

特に縄文中期の集落跡は、隣接する同時期の巨大集落、三内丸山遺跡を考える上で、貴重な資料となりうるものです。

この試掘調査成果が広く文化財の保護と研究に活用され、また地域社会の歴史学習や、地域住民の文化財保護意識の涵養につながることを期待したいと存じます。

最後になりましたが、調査の実施と報告書の作成にあたり関係各位からご協力、ご指導を賜りましたことに対して、心から感謝の意を表します。

平成９年３月

青森県教育委員会

教育長　松　森　永　祐

例　　言

1　本報告書は、青森県埋蔵文化財調査センターが平成６年度及び７年度に試掘調査した青森県総合運動公園整備拡張事業に伴う近野遺跡の試掘調査報告書である。

2　本遺跡は、平成４年３月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』に遺跡番号01065として登録されている。

3　本報告書は青森県埋蔵文化財調査センターが編集作成した。なお、執筆者名は依頼原稿については文頭に記し、それ以外は秦が担当した。

4　引用・参考文献は、依頼原稿についてはその文末に、その他は巻末に記した。

5　下記の通り、試掘調査時呼称していた遺構名を変更した。

○第６号住居跡は第１号竪穴遺構とした。

6　遺構名には、遺構種別に平成６年度・７年度調査で統一した通し番号を付けており、過去の調査との連番にはなっていない。

7　資料の分析、鑑定については、下記の方に依頼した（敬称略）。

遺跡周辺の地形と地質	青森県立板柳高等学校教諭	山口　義伸
石器の石質鑑定	八戸市文化財審議委員	松山　　力
調査区内の沢地土壌	国立歴史民族博物館助教授	辻　誠一郎

8　本書に掲載した地形図（遺跡の位置）は、建設省国土地理院発行の２万５千分の１の地形図を複写したものである。

9　本文・図中の表現は原則として次の様式、基準に従った。

・土層等の色調観察には１９００版農林水産省水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄1900）を使用した。

・挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、遺物写真の縮尺は不同である。

・各遺構の規模においてはそれぞれ最大値を計測した。なお遺物を含めて表中での計測値は、（計測値）で残存（又は確認）最大値を示し、[計測値]で推定・復元最大値を示している。

・平安時代の竪穴住居の壁は、カマドが構築されている側の辺を東壁とした。

・表中・図中において以下のような略称を適宜使用した。

［遺構］　竪穴住居跡→「Ｈ」、竪穴遺構→「竪」、土坑→「土」、（遺構内）柱穴→「Pit」、（Ａを）切る→「＞（Ａ)」、（Ａに）切られる→「＜（Ａ)」

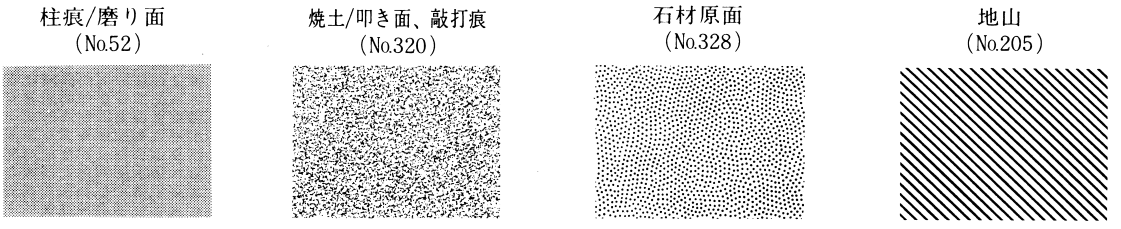
［土質］　白頭山苫小牧火山灰→「Ｂ－Ｔｍ」、

［遺物］　円筒上層式→「円上」、円筒下層式→「円下」、単軸絡条体→「単絡」、結束第１種→「結１」、回転糸切り痕→「回糸切」、ロクロ調整痕→「ロクロ」

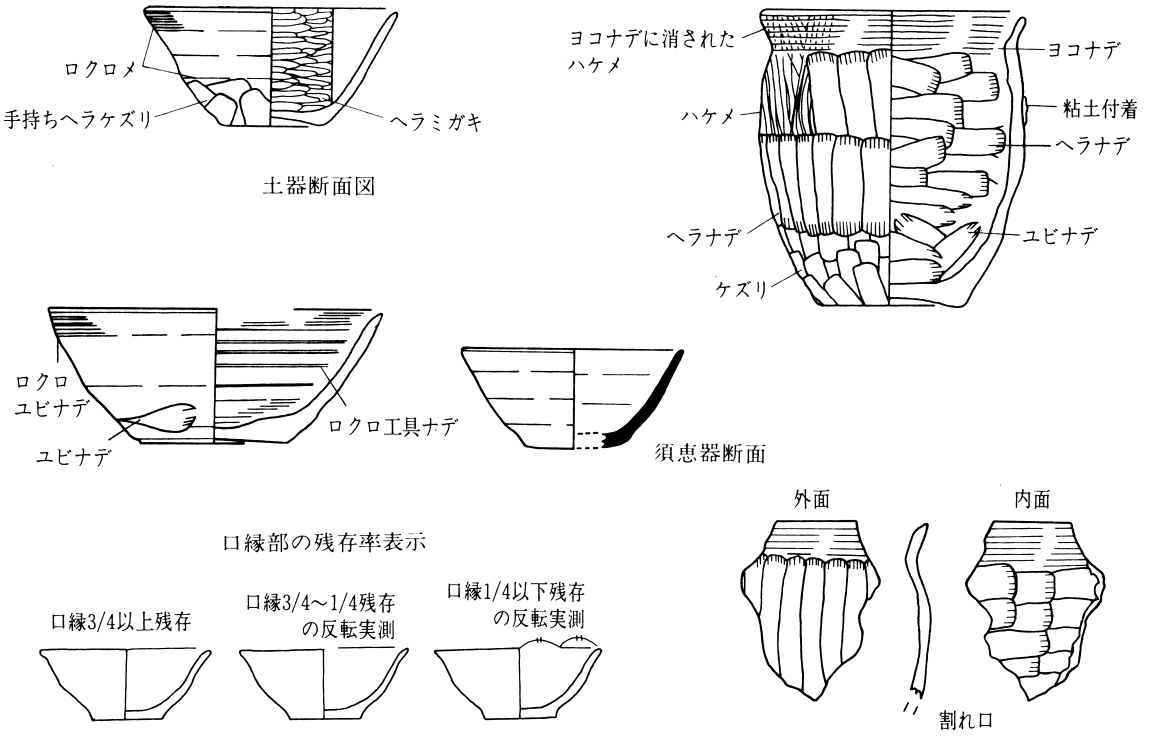
［石質］　珪質頁岩→「珪頁」、玉髄質珪質頁岩→「玉珪」、黒曜石→「黒」、鉄石英→「鉄」、凝灰岩→「凝」、溶結凝灰岩→「溶凝」、砂岩→「砂」、安山岩→「安」、流紋岩→「流」、輝緑岩→「輝」、花崗岩→「花」、閃緑岩→「閃」、緑色片岩→「緑片」、細粒凝灰岩→「細凝」、緑色

細粒凝灰岩→「緑細」、ホルンフェルス→「ホル」、蛇紋岩→「蛇紋」

・図中に用例のない限り、次の意味でスクリーントーンを使用している。



・遺物実測図の書式は以下の通りである。



10　試掘調査での出土遺物・実測図・写真等は、現在青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。

11　本報告書の作成にあたり下記の方々に資料の観察等の助言をいただいた（敬称略・順不同）。

林兼作、遠藤正夫、小谷地肇、木本雅靖、田澤淳逸、長尾正義

目　　次

序
例　言
目　次
第１章　調査に至る経緯と概要
第１節　調査に至る経緯…… 1
第２節　調査要項…… 1
第３節　調査方法…… 5
第４節　調査の経過…… 6
第５節　調査区内の現況と土層…… 13
第２章　検出遺構と出土遺物
第１節　縄文時代の遺構と遺物…… 14
第２節　平安時代の遺構と遺物…… 26
第３章　遺構外の出土遺物
第１節　縄文・平安時代の遺物…… 31
第４章　自然科学的分析調査の成果
第１節　遺跡周辺の地質と地形…… 38
まとめ…… 44
報告書抄録…… 48
写真図版…… 49

第１章　調査に至る経緯と概要

第１節　調査に至る経緯

青森市安田字近野にある青森県総合運動公園は昭和41年に建設され、その後、昭和52年の国民体育大会の開催により、拡張されることになった。これに伴い、昭和48年から昭和51年まで予定地内に所在する近野遺跡の発掘調査が実施された。

平成３年に至り、施設が手狭になったことや老朽化により、県総合運動公園の拡張整備事業が進められることになり、事業に先立ち三内丸山遺跡の試掘調査が実施されることとなった。

平成４年からは、県教育委員会による新県営野球場と鉄塔の予定地、青森市教育委員会による都市計画道里見丸山線予定地の調査が実施され、平成５年まで継続された。

平成６年は、野球場予定地の継続調査とサッカー場予定地内の調査が実施されたが、調査の進展に伴い、重要な発見が相次いだことから、平成６年８月１日に野球場の工事の中止と遺跡の保存が決定された。さらに、12月16日には、三内丸山遺跡を保存することとし、野球場予定地及びその周辺を含む約38ヘクタールを保存・活用していくこととなった。

この間、保存・活用決定後の施設配置の資料とするため、及び三内丸山遺跡との関連を調べるため、近野遺跡の試掘調査が実施されることとなり、平成６年10月12日から県民体育館に面する緑地帯の調査に着手した。

また、都市計画道里見丸山線も振り替えられることとなり、平成７年に振り替え予定地の試掘調査を実施した。

第２節　調査要項

［平成６年度調査］

１　調査目的

青森県総合運動公園拡張整備事業の実施に先立ち、当該地区に所在する青森市近野遺跡の試掘調査を行い、開発と保存の調査を図るための基礎資料を作成するものである。

２　試掘調査期間

平成６年度10月12日から同年11月14日まで

３　遺跡名及び所在地

近野遺跡

青森市安田字近野２１９外

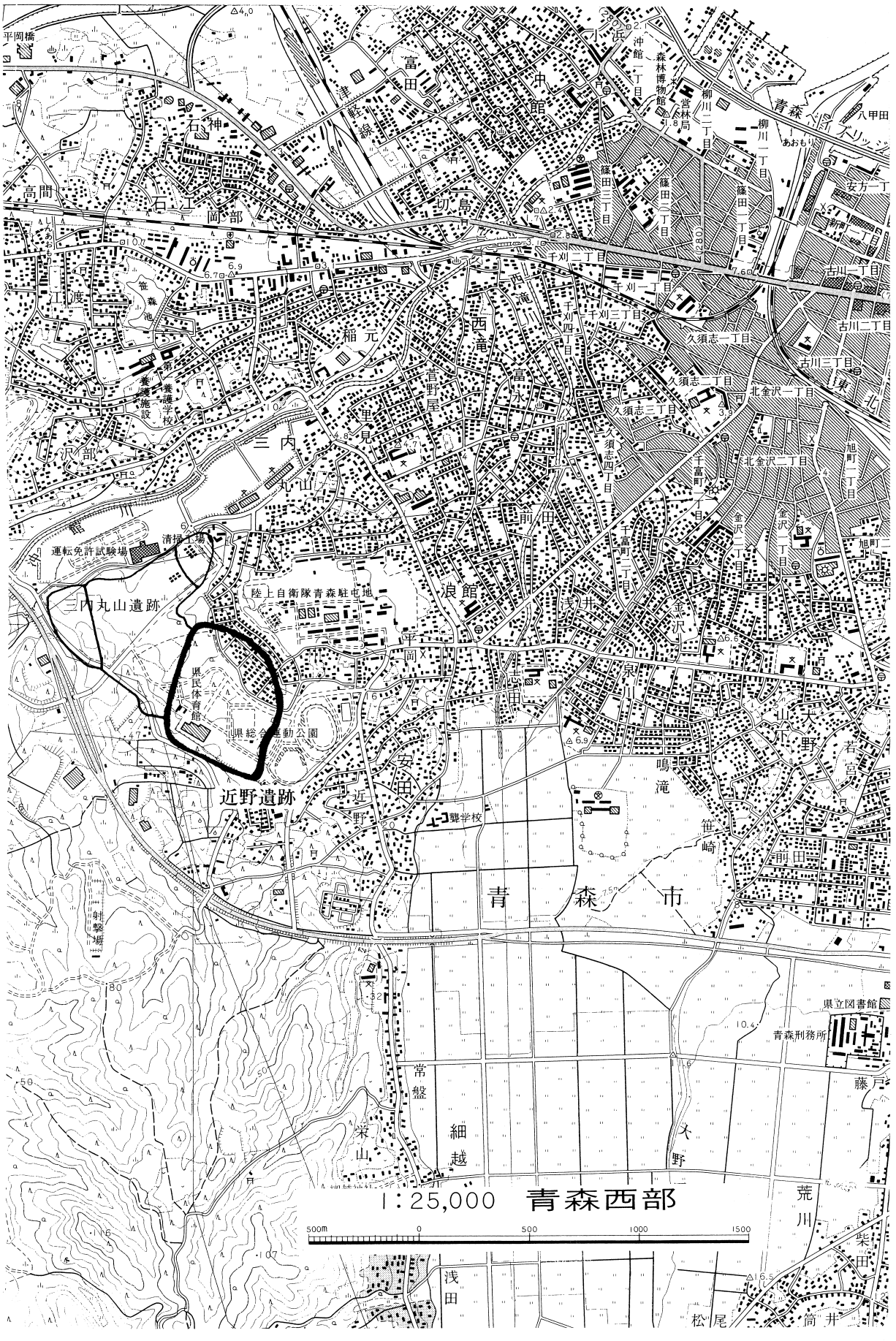


図１　遺跡の位置

4　試掘調査面積

576m²

5　調査委託者

青森県土木部

6　調査受託者

青森県教育委員会

7　調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査協力機関

青森市教育委員会

東青教育事務所

9　調査参加者

調査指導員	村越　潔	青森大学教授（考古学）
調査協力員	池田　敬	青森市教育委員会教育長

調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
調査第四課	課　長	成田　滋彦（現、教育庁文化課三内丸山遺跡対策室主幹）
	主　事	秦　光次郎
	調査補助員	小野　悦子、高田　麻紀子

［平成７年度調査］

1　調査目的

青森県総合運動公園拡張整備事業の実施に先立ち、当該地区に所在する青森市近野遺跡の試掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財の活用に資するものである。

2　試掘調査期間

平成７年度８月２日から同年10月31日まで

3　遺跡名及び所在地

近野遺跡

青森市安田字近野219外

4　試掘調査面積

1,600㎡

5　調査委託者

青森県土木部

6　調査受託者

青森県教育委員会

7　調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8　調査協力機関

青森市教育委員会

東青教育事務所

財団法人青森県スポーツ振興事業団青森県総合運動公園

9　調査参加者

調査指導員	村越　　潔	青森大学教授（考古学）
調査協力員	池田　　敬	青森市教育委員会教育長
調　査　員	市川　金丸	青森県考古学会会長（考古学）
	高島　成侑	八戸工業大学教授（建築史）
	西本　豊弘	国立歴史民族博物館助教授（動物遺体）
	辻　誠一郎	国立歴史民族博物館助教授（古環境学）
	南木　睦彦	流通科学大学助教授（植物遺体）
	山口　義伸	青森県立板柳高等学校教諭（地質学）

調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター	
調査第三課	課　　長	成田　滋彦（現、教育庁文化課三内丸山遺跡対策室主幹）
	主　　事	木村　真明（現、青森県企画部　県史編さん室）
	主　　事	秦　光次郎
	調査補助員	成田　由美子、川口　哲子、佐藤　理、深畑　哲哉、高田　麻紀子

第３節　調査方法

１［調査の具体的指標］　調査対象区内での遺跡範囲の広がり、本調査を仮定した際の必要データ、三内丸山遺跡との関連性等の把握を目指した。７年度においては、以上に、Ｄ区・Ｆ区内に存在すると思われる沢・低地部分の利用状況の把握が加わった。これらの指標を、公園内の諸施設の保護、一般利用者の安全確保を前提とした範囲内で目指すこととした。

２［調査区内の小区設定］　平成７年度は、便宜上調査区内を小区に分割している。調査対象区東部の丘陵斜面上を「Ａ区」、弓道場北東の、造成された沢筋部分を「Ｆ区」、Ａ区とＦ区に挟まれた部分を「Ｂ区」、対象区北東端の、第二の沢筋が潜り込む部分を「Ｄ区」とし、Ｆ区・Ｄ区に挟まれた台地で、杉の疎林となる区域を「Ｃ区」、そこより台地先端側になる部分を「Ｅ区」とした。

３［グリッド設定］　以下の通り、三内丸山遺跡の旧野球場建設予定地区に準拠し、20×20ｍの大グリッドに基づく４×４ｍの小グリッドを設定した。調査用の座標基準線、グリッド設定法、グリッド呼称法も同一の基準を用いている。基準線・基準点の設定は、野球場建設計画用の基準杭№21を基準点とし、磁北を基軸とした。東西の基準線上の呼称は、Ａ、Ｂ、Ｃ…とアルファベットを付し、南北は１、２、３…と算用数字を付していった。北東交点がグリッド呼称である。東西基準線は、ＡからＴまでの２０セットで一区切りとし、アルファベットが重複する場合は、最初にローマ数字を付すこととしている。なお、当調査範囲内には、グリッド東西ライン上のＩＡ以東が含まれており、便宜上アラビア数字の“０”を冠することで対処している。基準杭№21はＶＡ－100に対応する。

４［ベンチマーク設定］　Ｃ・Ｄ・Ｅ区は、Ｄ区内の公衆便所に接する水準点（Ｈ＝16.071ｍ）から移動して利用した。Ａ・Ｂ区は三内丸山遺跡の調査用ベンチマークから移動して利用した。

５［トレンチ設定］　遺構確認、或いは沢地の利用状況把握を目的とし、トレンチ法を用いて調査した。トレンチは基本的に、グリッドに沿って設定されている。必要に応じて拡張した場合と、公園施設保護上の制約があった場合はこの限りではない。

６［土層の呼称］　上層から下層に、基本層序はローマ数字を、遺構内の土層には算用数字をふった。

７［遺物の取り上げ］　グリッド単位・層単位に行い、Ⅲa層以下については出来るだけ平面図の作成、レベリングを行い出土位置の記録に努めた。なお、グリッド面積以下の小トレンチについては、一部トレンチ名で取り上げている。

８［粗掘り］　基本的に、人力によってトレンチ毎に作業を進めた。深さは遺構確認面の下限となる基本層序第Ⅳ層までとした。粗掘り途中で埋設管等の施設が発見された場合は、粗掘りを中止し、別にトレンチを設定した。造成時の盛土が厚い区域については、小型のバックフォーを用いて、盛土を除去した。杉等の樹木についてはその保護のため、最低でも幹の直径×1.5倍の範囲で周りに土を残すこととした。植え込み、その他施設構造物については、１割勾配分の間隔をとった。又、芝地内のトレンチ粗掘りでは、ブルーシート上に排土し、混土による芝の枯死を防ぐよう努めた。

９［遺構精査］　遺跡のより詳細な把握ため、確認遺構のうちいくつかを精査した。精査には二分法、四分法を用い、その性格把握に努めた。

10［記録］　実測図の作成は1/20を基本とし、必要に応じて1/10、1/40等の縮尺とした。写真撮影は適

宜行うこととし、使用フィルムはカラーリバーサルとモノクロームの35㎜とした。

11［埋め戻し］　精査済みの遺構は、保護のために山砂を用いて埋め戻した。確認のみの遺構については、その輪郭を厚く不消石灰で縁取りし、再確認の便を図った。１メートルを越える深いトレンチは、沈み込みを防ぐために重機による塡圧を施した。芝生地内の調査トレンチは、排土を埋め戻した後、粗掘り時に切り取った芝を再度貼り込んで原状復帰とした。

第４節　調査の経過

［６年度］平成６年10月に、調査区内へのグリッド・ベンチマークの移動等の調査準備を行い、18日に調査を開始した。先ず調査トレンチをグリッドに沿って配置し、トレンチ内の芝生の除去等ののち粗掘りに入った。対象区域は、７年度でいうＣ・Ｅ・Ｆ区である。

調査後まもなく、Ｃ区以外の区域では、大部分が削平されているか、公園造成時の盛土が施されていることが判明した。特に盛土部分は人手による調査は不可能と判断し、重機の導入を検討した。

10月下旬より本格的に、小型のバックフォーによるＦ区トレンチ内の盛土除去を行った。しかし北側部分は現地表下３ｍでも盛土が尽きず、設定したが地山まで至れないトレンチもあった。また、使用中の高・低圧電線、上下水道管が確認される場合も多く、調査は慎重を極めた。Ｅ区の52年度調査区域側は密な調査が必要と思われたが、高圧電線が埋設されており、大部分が調査不能であった。これらの要因によって調査は難航し、沢地部分に不明点を残しながら11月14日に調査を終了した。

［７年度］平成７年８月２日に、調査資材の搬入、調査区の縄張りをし、調査を開始した。同時に前年の調査杭を使用し、Ｃ区内及びＡ区内のグリッド及びトレンチの設定を行っていった。粗掘りは最も包蔵状態の不明なＡ区及び、最も残存状態の良好と思われるＣ区から手がけた。

８月８日に調査委託者を含めた打合せ会議が行われた。その際に、調査区内の沢地部分の調査の必要性が打ち出され、Ｄ区・Ｆ区の調査を早急に行えるよう準備を始めた。中旬は、設定予定地内の埋設管をさけるために小トレンチを先行させ、位置の正確な把握を行った。又、Ｂ区の調査に着手した。

８月下旬にＢ区粗掘り着手と、Ｄ区のトレンチ調査を行った。Ｄ区は3.5ｍで地山に達し、厚さ５～10㎝程の新しい沼泥層が確認されたのみで、土層の殆どが公園造成時の盛土であった。

９月上旬にはＤ区の埋め立て、原状復帰を完了し、Ｆ区の樹木と芝生の移動、Ｅ区の先行トレンチに着手した。中旬にＦ区の調査を行った。６年度に確認された沢の、より下流にあたる部分である。掘削後まもなく、公園造成時の盛土が、深いところで５ｍは越えることが判明した。重機掘削に限界があったため、ボーリングによるコア観察も併用する事となった。10月上旬に現地で辻誠一郎氏に確認していただいたところ、現地表面下6.5ｍで泥炭化途中の土壌を確認したが、利用痕跡が見あたらず、仮に木質遺物があったとしても残存しないであろうとのことであった。これによって平面調査の必要性を失い、また公園保護上、安全面での理由からも、今回の調査を終了するべきとの結果となった。トレンチは盛土が脆弱で危険であったため、早急に埋め戻し作業を行った。９月下旬にはＡ区・Ｂ区の調査を終了し、原状復帰作業に入った。

10月はＣ・Ｅ区内の遺構分布の把握に努め、遺構確認作業と平行して、いくつかの遺構精査を行った。また調査終了区域から埋め立ててゆき、塡圧・芝張り等の原状復帰作業も行っていった。

10月31日に、予定通り全ての作業を終了し、調査資材を撤収した。

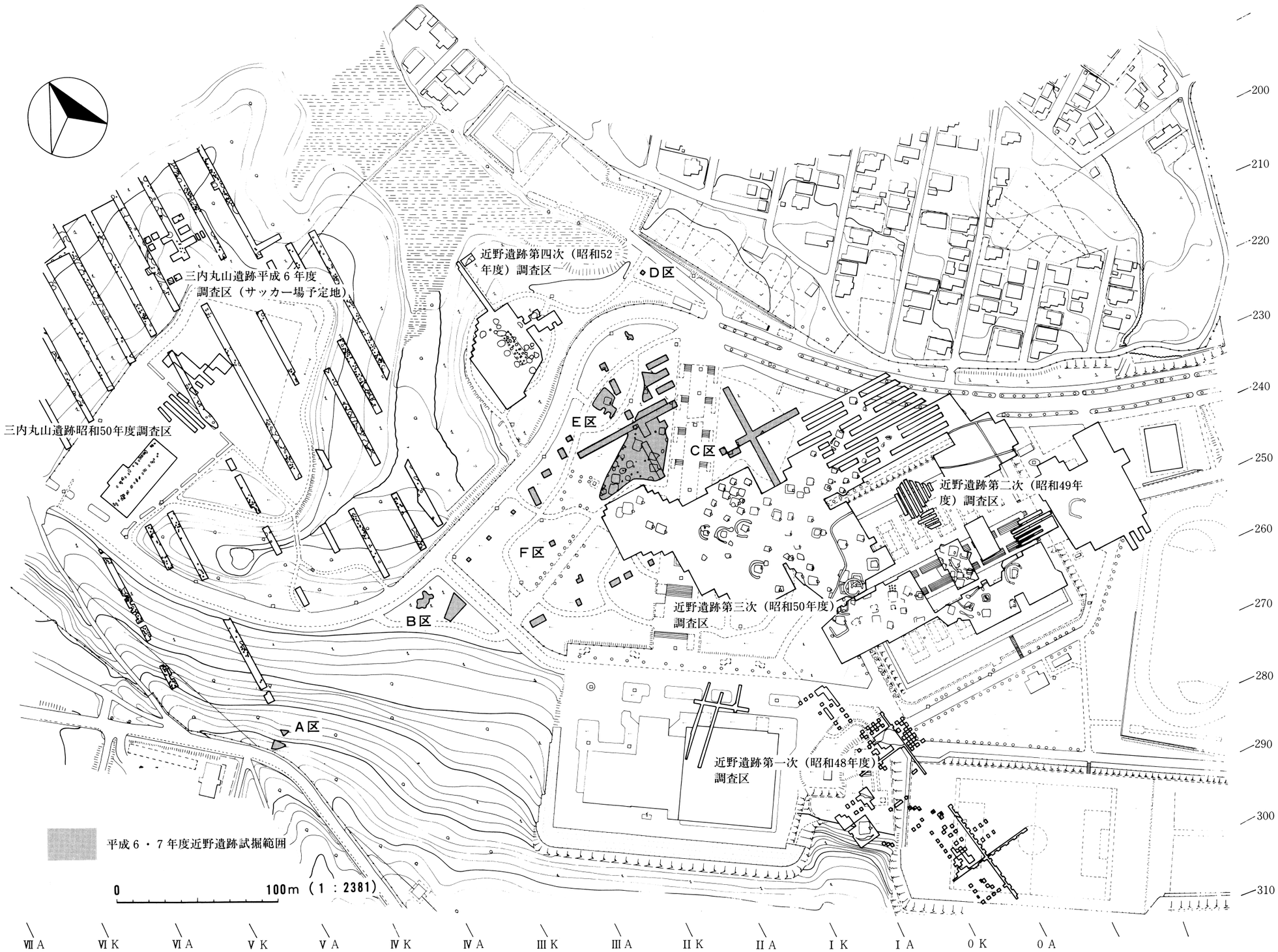


図２　近野・三内丸山遺跡調査状況

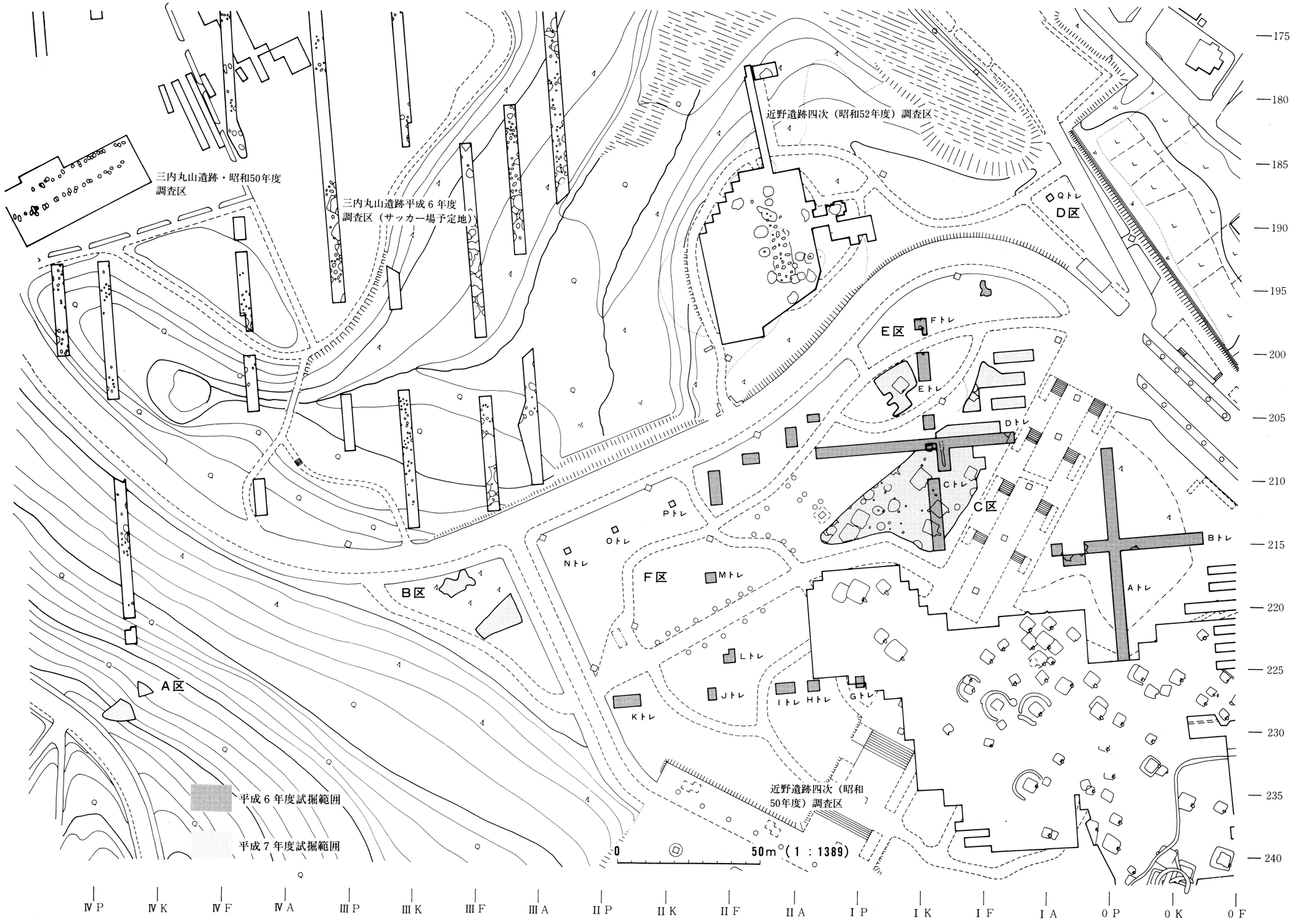


図３　平成６・７年度近野遺跡試掘範囲

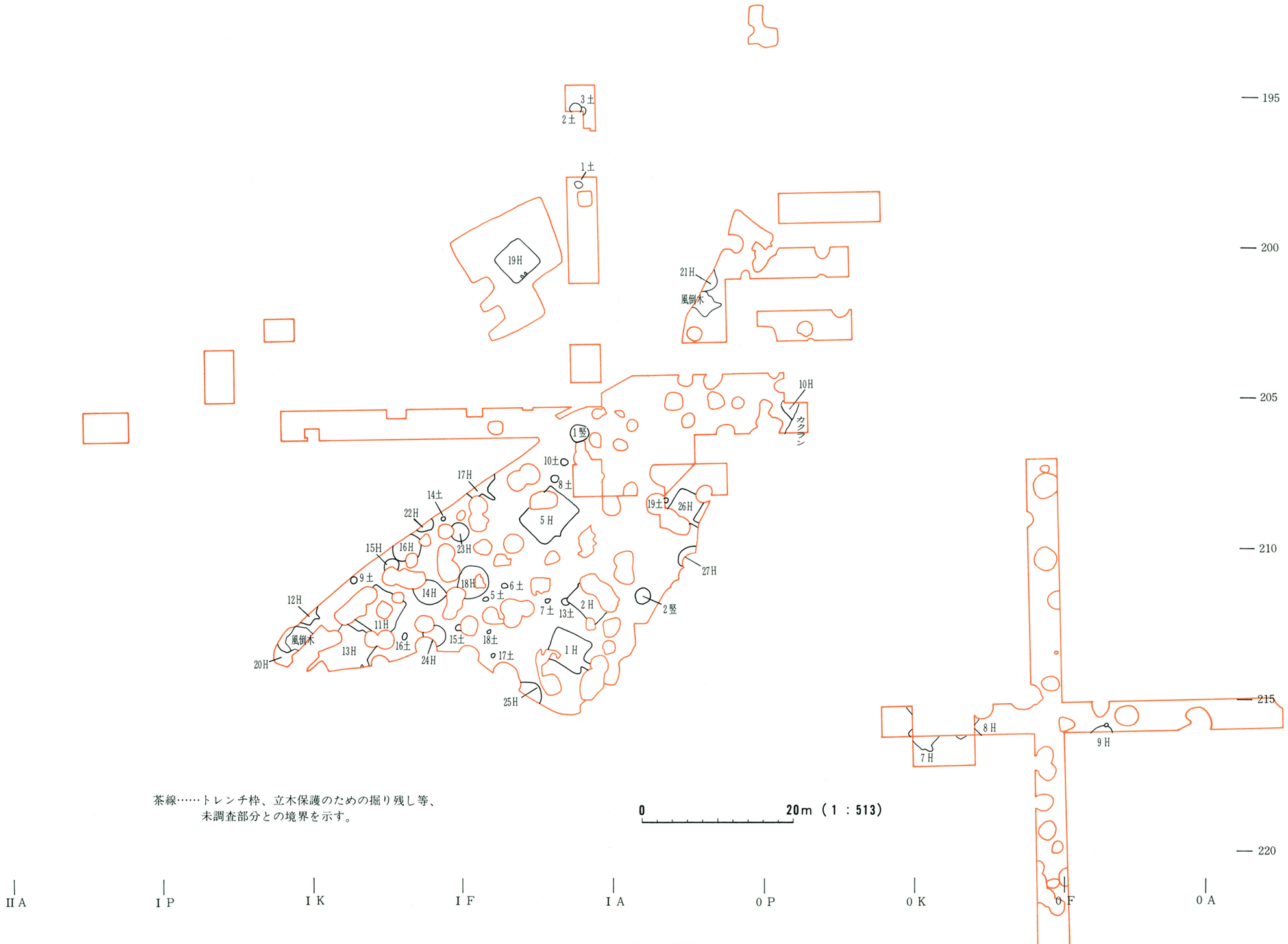

195
200
205
210
215
220
3土
2土
1土
19H
21H
風倒木
10H
カクラン
1竪
10土
8土
17H
14土
22H
5H
19土
26H
15H
16H
23H
27H
9土
18H
6土
12H
14H
5土
7土
13土
2H
2竪
11H
風倒木
16土
15土
18土
13H
20H
24H
17土
1H
25H
8H
9H
7H
茶線……トレンチ枠、立木保護のための掘り残し等、
未調査部分との境界を示す。
0
20m（1：513）
ⅡA
ⅠP
ⅠK
ⅠF
ⅠA
0P
0K
0F
0A

図４　Ｃ・Ｅ区遺構配置図

第５節　調査区内の現状と土層

調査区は現在使用中の公園である。Ａ区は中位段丘の斜面にあり、山林となっている。Ｂ区は、Ａ区と低位段丘が接する部分であり、疎林及び芝生地となっている。Ｃ区は、体育館からの中央プロムナードによって東西に分断される杉の疎林である。唯一、公園造成以前の原状を保っていると考えられる。Ｄ・Ｅ・Ｆ区は車道に接する区域であり、遊歩道の巡らされる權木・芝生地である。

基本層序は第４章に、その各地区での残存状況を２章で後述するとして、ここではＦ区沢地内の土層について記述する。

1　黒色土　ヨシの根等の草本植物を多く含む。公園造成時まで地表であった部分と思われる。

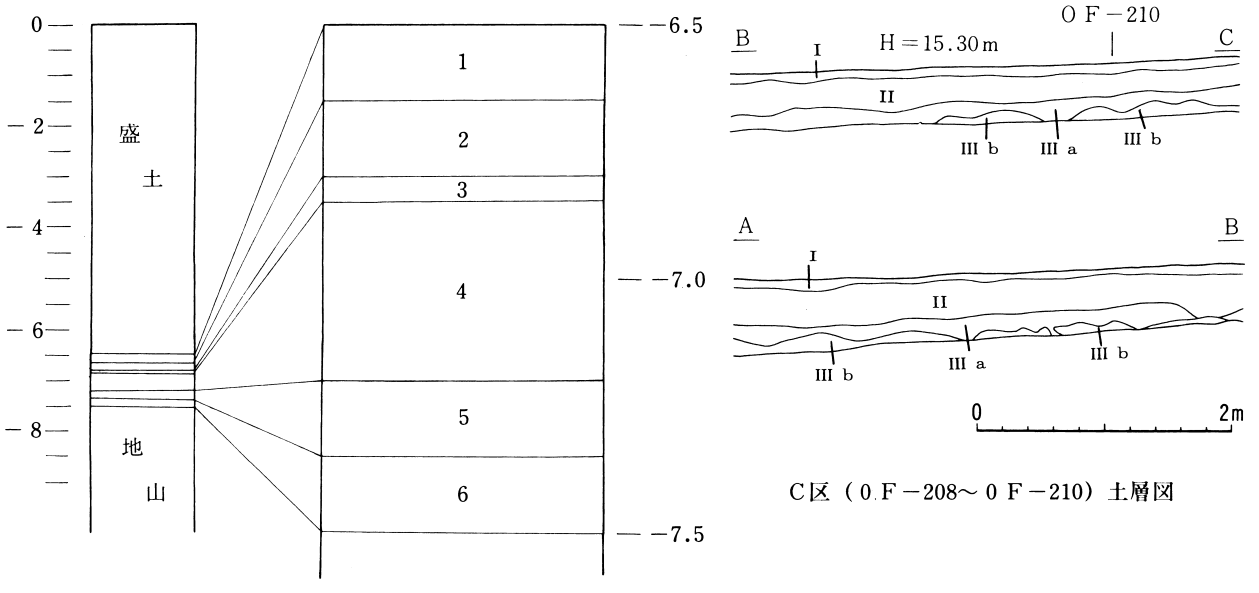
2　暗灰色シルト層　相当均質なシルトである。貝殻状断口をもち、沼地の堆積と思われる。

3　粗砂層　　純粋な砂層である。やや水の流れが速い時期があったと推測できる。

4　暗褐色粘質土層　いわゆるサルケである。草本泥炭と呼ばれる泥炭化途中の土壌。大部分がヨシ□由来であるが、ハンノキと思われる黄色い木皮状のピートを多量に混入する。下部は黒色化し、何らかの降下火山灰がとぎれとぎれに堆積する。

5　黒色粘質土　４層とは漸移し、層界は画然としない。希に縄文土器の小片が見られた。

6　灰色粘質土　地山との漸移層。ロームの水性二次堆積と思われる。



Ｆ区　Ｐトレンチ内土層

Ｃ区（０Ｆ－208～０Ｆ－210）土層図

図５　調査区内の土層

第２章　検出遺構と出土遺物

第１節　縄文時代の遺構と遺物

第14号住居跡（図６～図８）

［**位置と確認**］　Ｃ区、ＩＦ～Ｇ－210～211に位置し、７年度調査においてⅢb層中より確認した。

［**重複**］　無し。土器の接合関係から、第18号住居跡より新しいと考えられる。

［**平面形・規模**］　不整楕円形の平面形を呈する。規模は長軸414cm、短軸310cm、床面積は8.73m²である。長軸の傾きはＮ－88°－Ｅである。

［**壁・床面**］　基本層序第Ⅲb層を掘り込んで壁とし、Ⅳ層下位を床としている。壁は良く掘り整えられ、確認面から床面まで25cm程である。南東側の壁に接して、若干テラス状となる地山削りだし部分があるが、その他の床面は平坦である。炉周辺部から特殊施設にかけての床の踏み締まりが強い。

［**壁溝**］　北東及び南側の壁際に検出された。幅10cm、深さ５cmほどである。

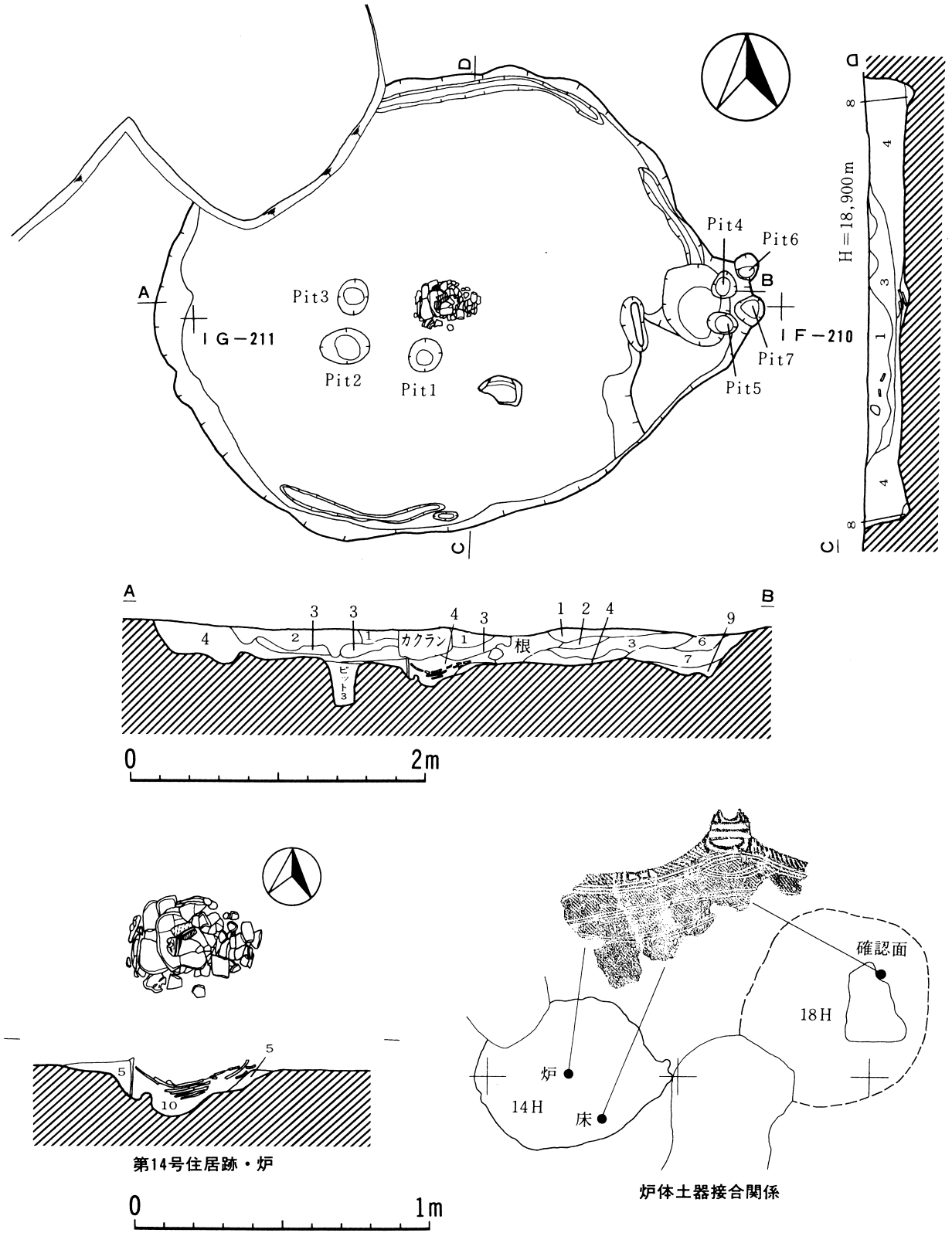
［**柱穴**］　７本検出され、それぞれの深さはPit1…25cm、Pit2…27cm、Pit3…38cm、Pit4…15cm、Pit5…25cm、Pit6…13cm、Pit7…24cmである。Pit1からPit3は何れも炉に近い形で配置されている。最も炉に接するPit1からは、柱痕が確認されている。どのように受熱を免れたか不明であるが、柱自体は立っていたものと考えられる。Pit4からPit7は、何れも直径10cm程で、東側張り出し部の壁にまとまって配置されている。全体の上屋構造とは別に、特殊施設の構造のみに係わるものかと推定される。

［**炉**］　住居中央より土器片敷炉が検出された。床を断面鍋底形に粗く掘り込み、多少土を挟んで土器片を敷き詰めている。破片の殆どは内面を上向きにしてあった。使用された破片は、深鉢の同一個体上半部である。西縁には口縁片が突き立ててあり、土器片囲いの形態をも持っている。焼土の形成は顕著ではない。又、この炉を中心とした床面上に、きめの細かい黒色土がこびりつくように薄く堆積していた。他の堆積土と比べ、明らかに異質な土壌で、炭化物の変化と思われる。作り替えの痕跡は見られなかった。なお炉体土器片は、床面と、第18号住居跡の確認面で集中して出土した土器片と接合する。口径が40cmを越す大型土器と推定されるが、口縁部以外は厚さ５mm未満である。砂粒の多さと二次加熱による器面荒れのため、個体復元には至らなかった。

［**その他の施設**］　南西部に張り出し状の特殊施設が確認された。壁外に半分程張り出す窪み部分と、その張り出す方向の壁中に位置する小ピット（Pit4からPit7）、さらに窪み部分と、床の平坦面の南側とを区画する堤状部分より構成される。窪み部分は長径50cm、床面から深さ10cm程の規模で鍋底状に掘り込まれている。底面に踏み締まりが全くなく、脆弱な印象である。堤状部は、テラス状部分に半分重なる形で検出された。Ⅳ層土を盛り固めて構築しており、上面・構築面の二面に、床面が形成されている。住居築造当初、若干の居住期間を経てから構築された可能性が考えられる。

［**堆積土**］　褐色土主体の堆積土である。草木による撹乱が激しい。３層と４層は、Ⅲb層・Ⅳ層土の投棄ブロックが比較的密で、人為堆積層の可能性が最も強い。

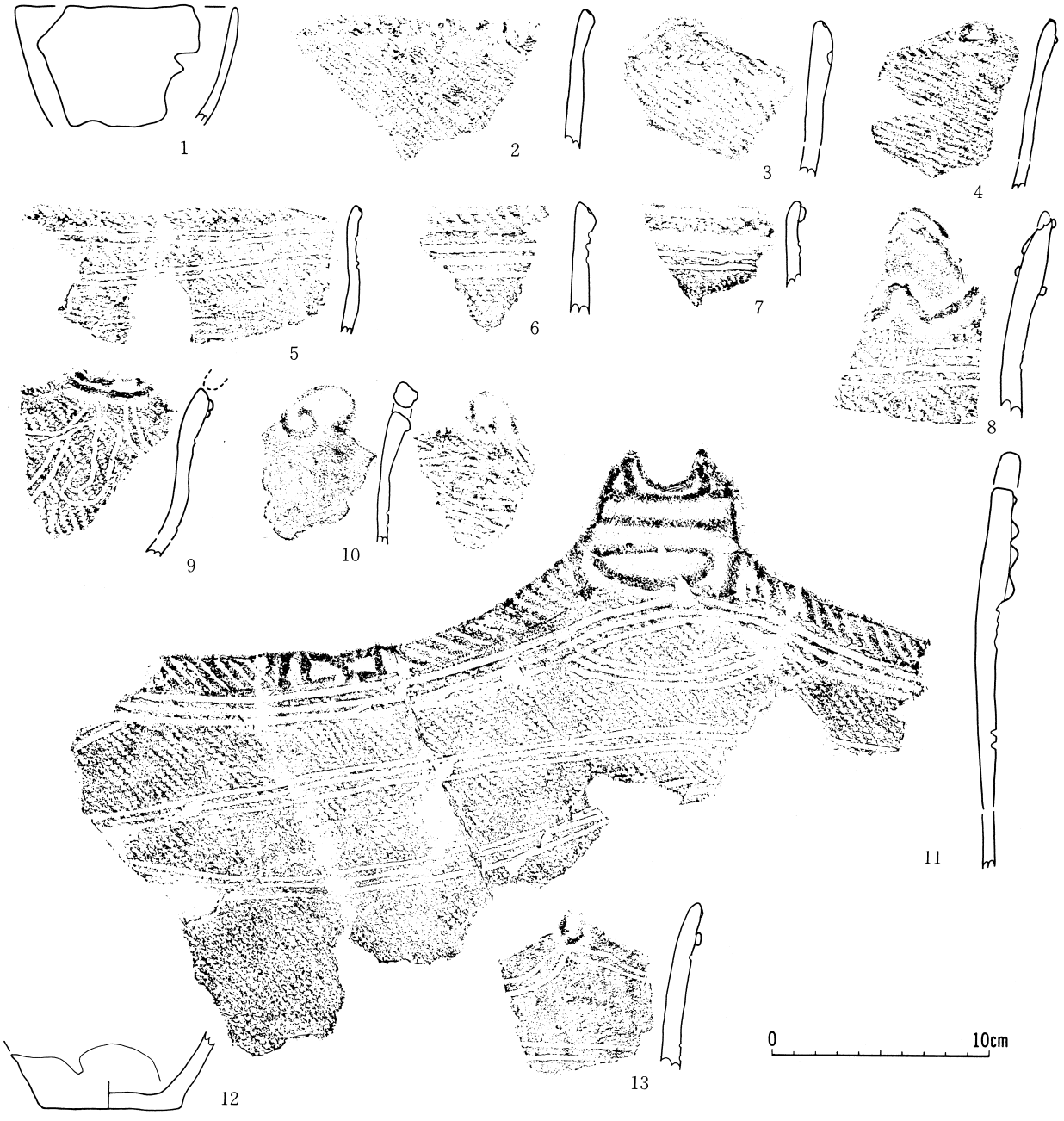
［**出土遺物**］　覆土・床面より土器片が出土している。床面からは石皿等が検出されている。



第14号住居跡・堆積土

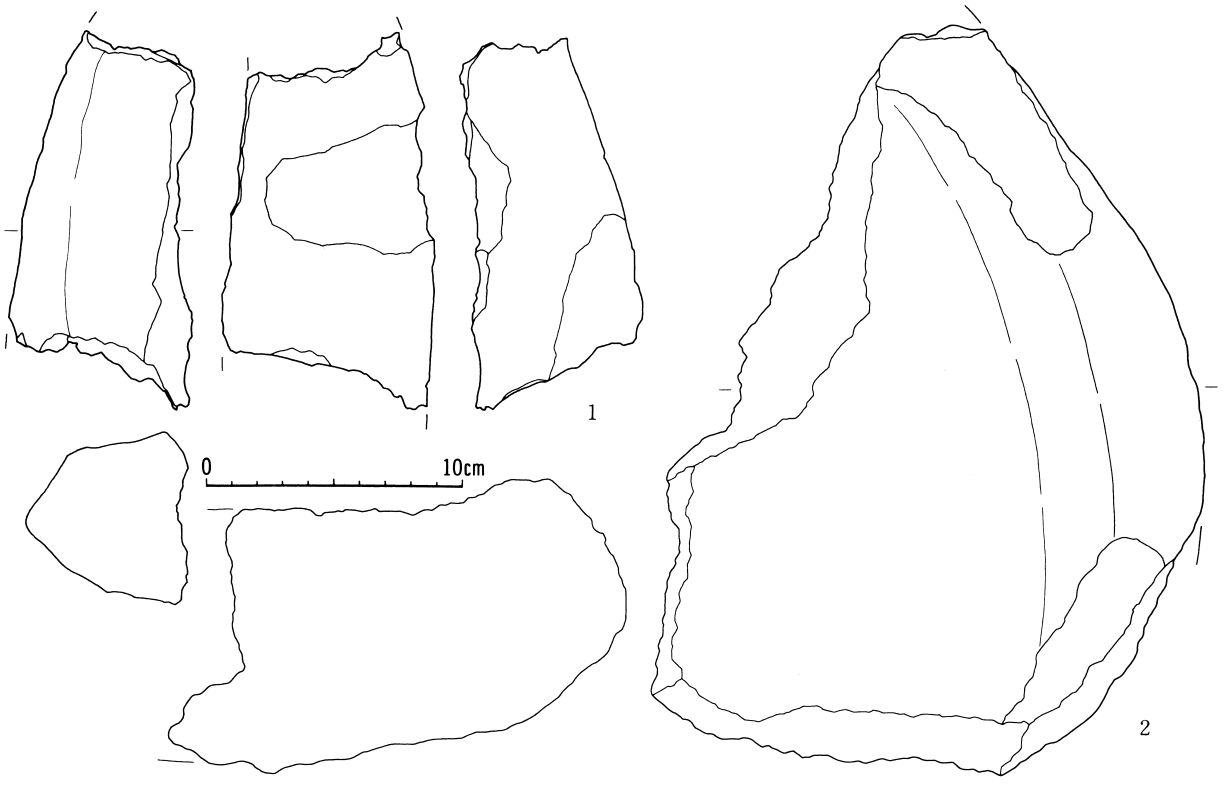
1層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	Ⅲa層土ブロック中量。	6層	暗褐色土	10YR3/3	しまりなし。
2層	黒褐色土	10YR3/2	炭化粒微量。	7層	黒褐色土	10YR2/2	炭化粒少量。
3層	褐色土	10YR4/6	マトリックスⅢa層。Ⅲb・Ⅳ層ブロック中量。しまり強い。	8層	明黄褐色土	10YR6/6	マトリックスⅣ層。
4層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	Ⅲa層土凝集ブロック多量。	9層	褐色土	10YR4/6	炭化粒微量。Ⅳ層ブロック中量
5層	黒褐色土	10YR2/2	均質な粘質シルト。	10層	暗褐色土	10YR3/3	Ⅳ層浮石・炭化物少量。

図６　第14号住居跡



No.	器種	部位	出土地点	出土位置	外面文様	分類	備考
1	鉢型	口縁	14H	1層	無文	Ⅱc	
2	深鉢	口縁	14H	確認面	RRL押圧・横位回転、粘土紐貼付	Ⅱc	
3	深鉢	口縁	14H	確認面	RL押圧・横位回転	Ⅱc	
4	深鉢	口縁	14H	1層	RL横位回転、粘土紐貼付	Ⅱc	波状口縁
5	深鉢	口縁	14H	1層	RL横位・斜位回転、沈線、ヘラ刻み	Ⅱc	
6	深鉢	口縁	14H	床・面	LRL縦位回転、沈線、単絡1押圧	Ⅱc	
7	深鉢	口縁	14H	3層	RL横位回転、粘土紐貼付、沈線	Ⅱc	
8	深鉢	口縁	14H	7層	RLR横位回転、粘土紐貼付	Ⅱc	口縁に突起
9	深鉢	口縁	14H	確認面	RL横位回転、粘土紐貼付、沈線	Ⅱc	口縁に突起
10	深鉢	口縁	14H	1層	RL横位回転、粘土紐貼付、沈線	Ⅱc	口縁に突起
11	深鉢	口縁	14H	床・炉	LRL縦位回転、粘土紐貼付、沈線、単絡1押圧	Ⅱc	18H・P-19と接合
12	深鉢	底部	14H	2層	無文	Ⅱc	
13	深鉢	口縁	14H	4層	LR横位回転、粘土紐貼付、沈線、単絡1押圧	Ⅱc	

図7　第14号住居跡・出土遺物(1)



No.	出土地点	出土位置	器種	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）	石質	備　　考
1	14H	床面	石皿	(128)	(60)	(59)	784	石英安	特殊施設内
2	14H	床面	石皿	(297.5)	(212.5)	(116)	7400	石英安	

図８　第14号住居跡・出土遺物(2)

［時期］　覆土・床面出土土器の型式及び炉体土器の接合関係より、円筒上層ｅ式期の時期幅内で築造・居住・廃絶されたと思われる。特に築造時期は、第18号住居跡の廃絶後である可能性が高い。

１号竪穴遺構（図９～10）

［位置・確認］　Ｃ区、ＩＡ―205・206に位置する。Ⅲ層を粗掘り中に、暗褐色土の落ち込みを確認した。平成６年に第６号竪穴住居跡として確認し、平成７年に精査した。

［重複］　無し。

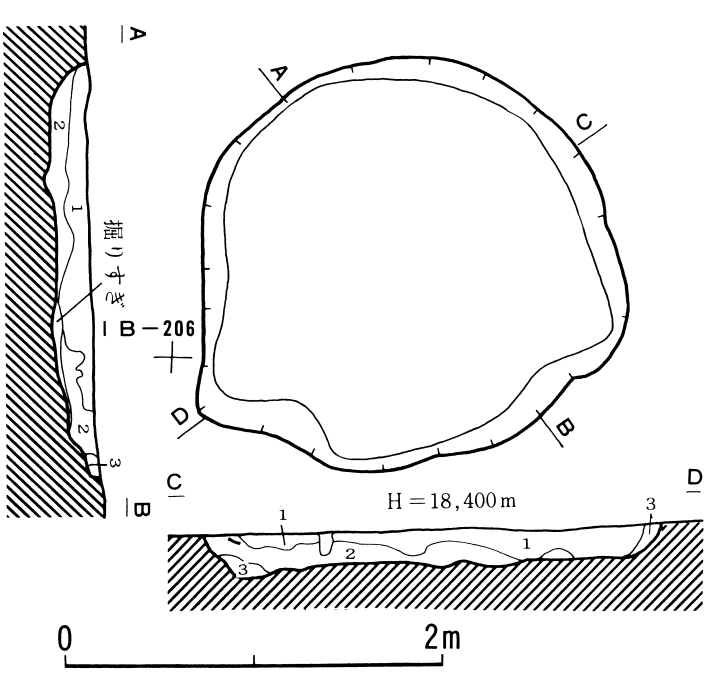
［平面形・規模］　不正円形を呈する。長軸210cm、短軸200cm、深さ28cmである。

［壁・底面］　壁は緩やかに立ち上がる。壁・底面ともに脆弱な作りで、残存状態も悪い。

［堆積土］　暗褐色土主体の土層で、１層は自然堆積かと思わせる感がある。後世の草木根によって、埋没時の堆積状態からも変化しているものと思われる。

［出土遺物］　縄文土器の破片が若干出土した。

［時期］　覆土出土土器より、縄文時代中期・円筒上層ｅ式期、又はそれ以降に廃絶された遺構と思われる。



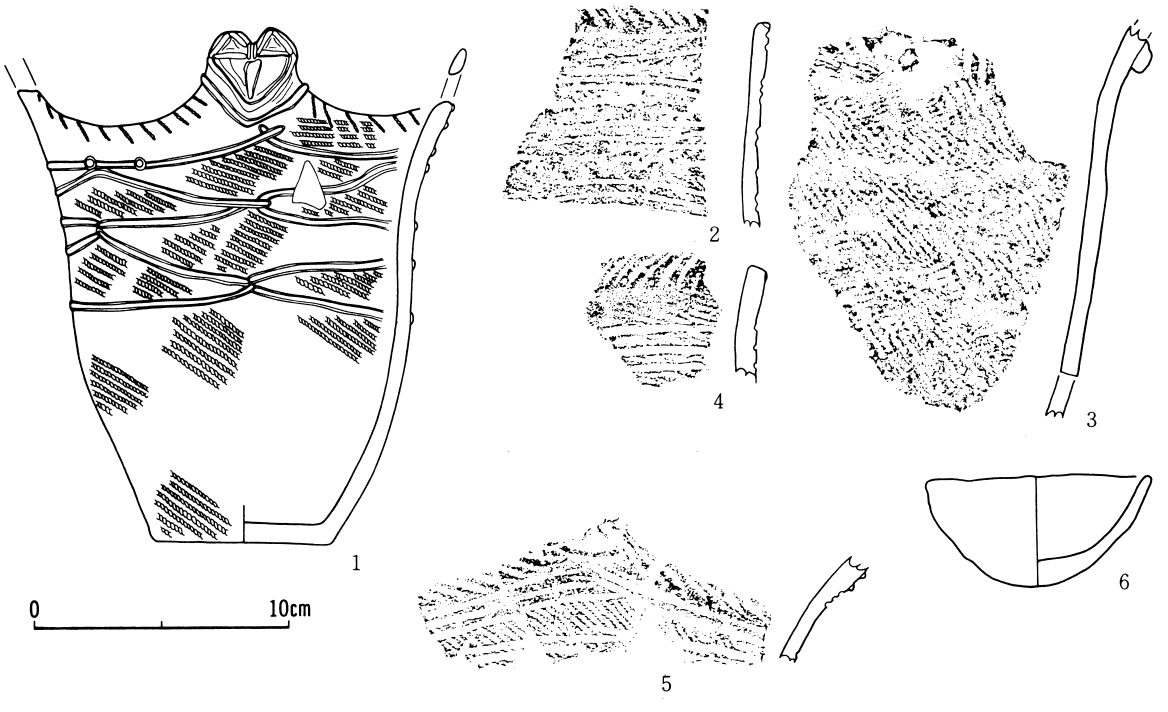
第1号竪穴遺構・堆積土

1層　黒褐色土　10YR 2/3　炭化粒中量、焼土粒微量

2層　暗褐色土　10YR 3/3　炭化物少量、ローム粒斑状に凝集。

3層　暗褐色土　10YR 3/4　炭化物微量。

図9　第1号竪穴遺構



No.	器種	部位	出土地点	出土位置	外面文様	分類	備考
1	深鉢	略完形	1竪	確認面	RL横位回転、粘土紐貼付、単絡1押圧	Ⅱb	
2	深鉢	口縁	1竪	確認面	RL横位回転、沈線、単絡1押圧	Ⅱc	
3	深鉢	口縁	1竪	2層	RL横位回転・押圧、粘土紐貼付	Ⅱc	
4	深鉢	口縁	1竪	1層	RL横位回転、沈線、単絡1押圧	Ⅱc	
5	深鉢	口縁	1竪	床	RL横位回転、沈線、粘土紐貼付、単絡1押圧	Ⅱc	
6	ミニチュア	略完形	1竪	確認面	無文	Ⅱb	

図10　第1号竪穴遺構・出土遺物

第５号土坑（図11～12）

［**位置・確認**］　Ｃ区、ＩＤ－211に位置する。Ⅲb層中において確認された。

［**重複**］　無し。

［**平面形・規模**］　長軸80cm、短軸74cm、深さ30cmの不正円形を呈する。

［**壁・底面**］　Ⅳ層を壁・底面としている。壁は良く掘り整えられ、堅い。立ち上がりの角度は直角を意識したものと思われる。底面はほぼ平坦である。

［**堆積土**］　投棄状のブロック土等、人為堆積と思われる痕跡は確認できなかった。

［**出土遺物**］　覆土より縄文土器の小片が数片出土した。

［**時期**］　覆土出土土器より縄文時代中期の円筒上層ｅ式期か、それ以降に埋没した遺構と思われる。

第６号土坑（図11～12）

［**位置・確認**］　Ｃ区、ＩＤ－210に位置する。Ⅲb層精査中に、暗褐色土のプランを確認した。

［**重複**］　無し。

［**平面形・規模**］　長軸86cm、短軸70cm、深さ24cmの不正円形を呈する。

［**壁・底面**］　壁は、底面より100～110°程の角度をもって立ち上がる。良く掘り整えられ、堅い。底面はほぼ平坦である。

［**堆積土**］　暗褐色土主体の土層である。チップ・フレークの出土状態より人為堆積と思われる。

［**出土遺物**］　覆土より縄文土器の小片が数点と、チップ、フレークが多く出土した。

［**時期**］　覆土出土土器より、円筒上層ｅ式期、又はそれ以降に埋没した遺構と思われる。

第７号土坑（図11～12）

［**位置・確認**］　Ｃ区、ＩＢ－211に位置する。Ⅲb層中において、暗褐色土の落ち込みを確認した。

［**重複**］　無し。

［**平面形・規模**］　長軸100cm、短軸96cmの不正円形を呈する。深さは32cmである。

［**壁・底面**］　Ⅳ層を掘り込んで壁・底面としている。壁は、底面よりカドを持たずに、110°程の角度で立ち上がる。良く掘り整えられ、崩落の痕跡等は見あたらない。底面はほぼ平坦である。

［**堆積土**］　投棄状のブロック土等、人為堆積と思われる痕跡は確認できなかった。

［**出土遺物**］　円筒上層ｅ式に相当する土器片が少量出土した。

［**時期**］　覆土出土土器より円筒上層ｅ式に比定できる土器片が出土している。

第８号土坑（図11～12）

［**位置・確認**］　Ｃ区、ＩＢ－207に位置する。Ⅲb層中において、褐色土の落ち込みを確認した。

［**重複**］　無し。

［**平面形・規模**］　開口部径88cm、底径108cm、深さ70cmで、不整円形の平面形を呈する。

［**壁・底面**］　Ⅳ層を掘り込み、壁・底面としている。断面形態はフラスコ型を呈する。底面はほぼ平坦である。

［**堆積土**］　壁の崩落土層等は見られない。人為堆積と思われる。

［出土遺物］　覆土より、縄文土器の小片が若干出土した。

［時期］　覆土出土土器より、円筒上層ｅ式期、又はそれ以降に埋没した遺構と思われる。

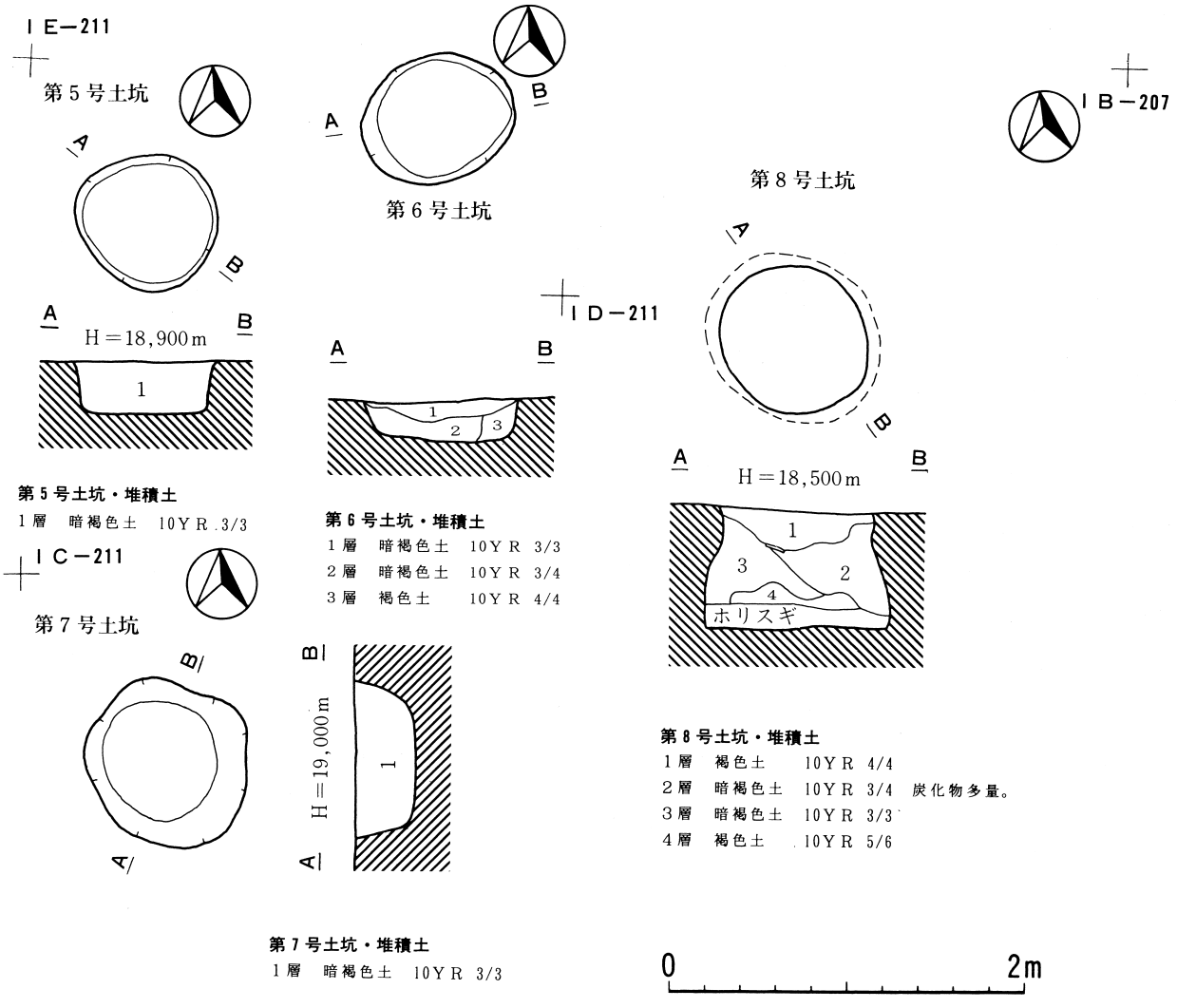
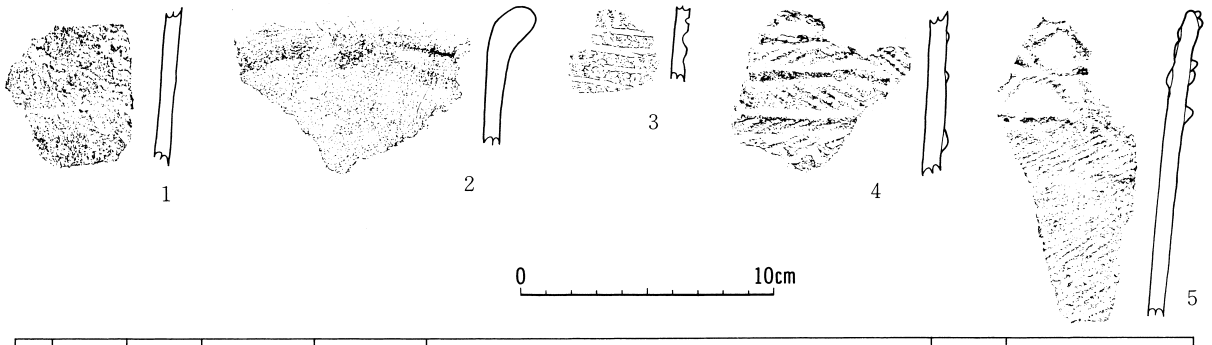
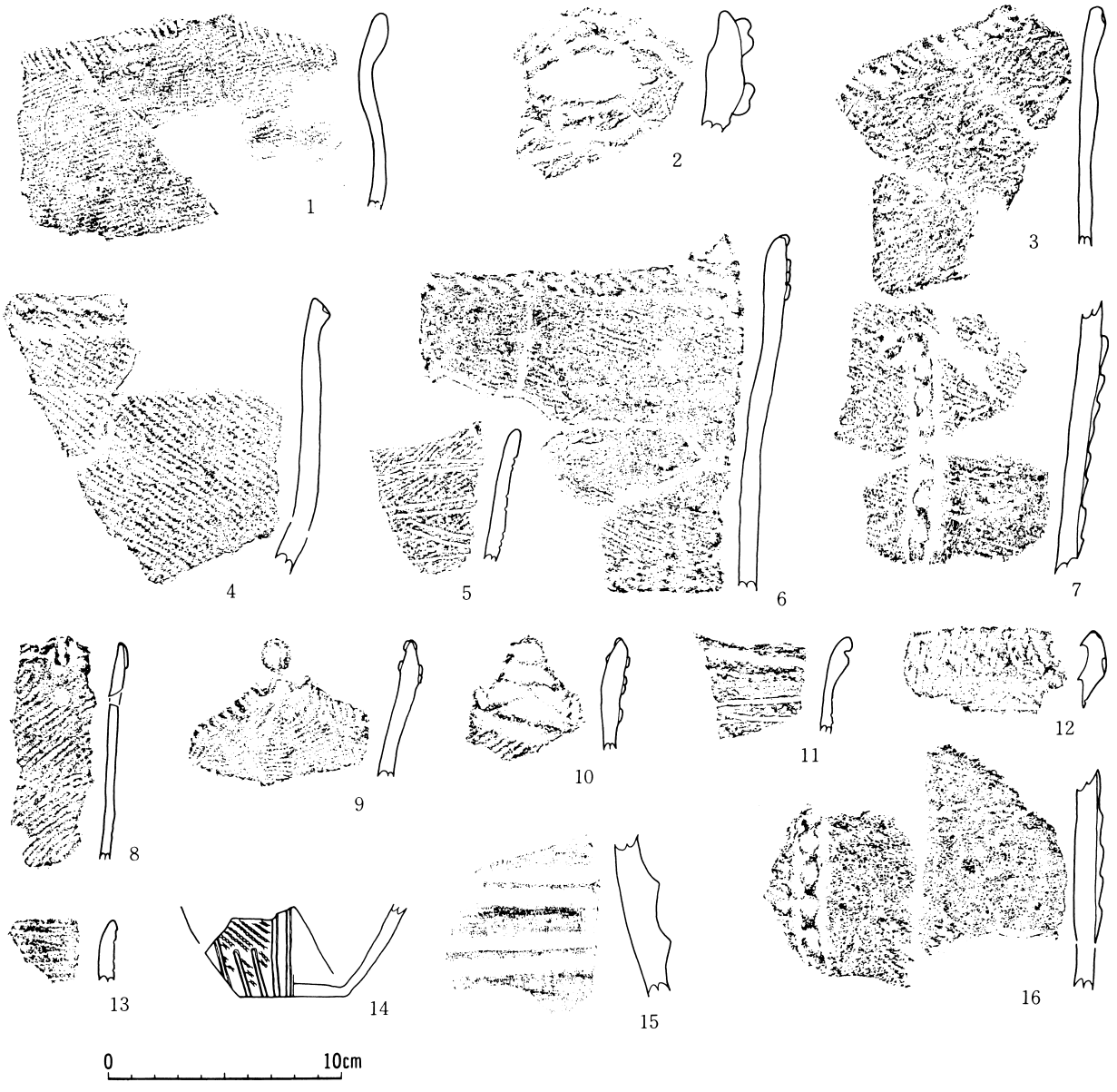


図11　第５・６・７・８号土坑



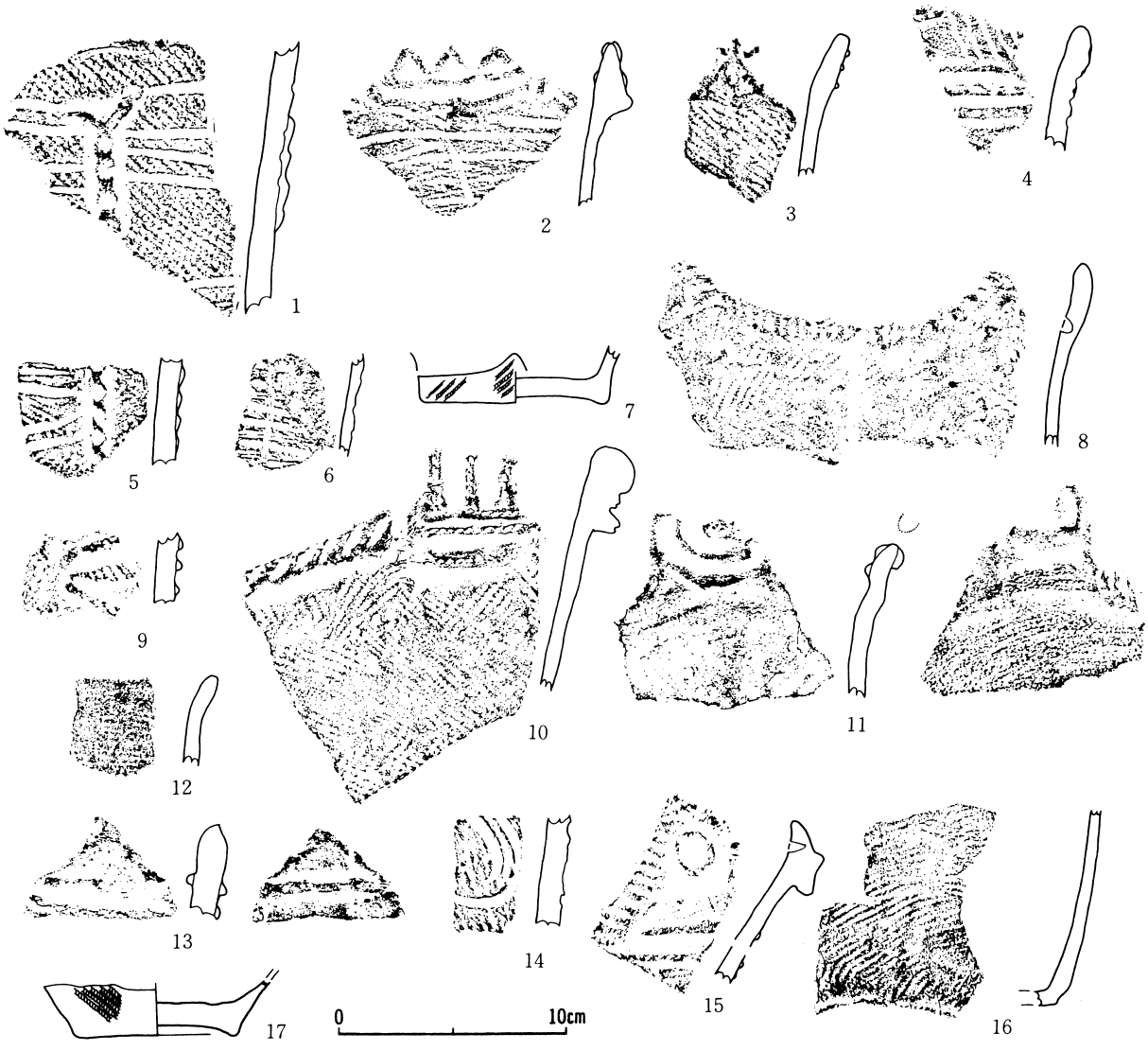
No.	器種	部位	出土地点	出土位置	外面文様	分類	備考
1	深鉢	胴部	5土	覆土	LR回転・押圧	Ⅱc	
2	深鉢	口縁	6土	覆土	無文、玉縁状口縁	Ⅱb	
3	深鉢	胴部	6土	覆土	RL斜位回転、沈線	Ⅱc	
4	深鉢	胴部	7土	覆土	RL・LR横位回転、粘土紐貼付	Ⅱb	
5	深鉢	口縁	8土	1層	0段多条RL横位回転、粘土紐貼付	Ⅱc	

図12　第５・６・７・８号土坑・出土遺物



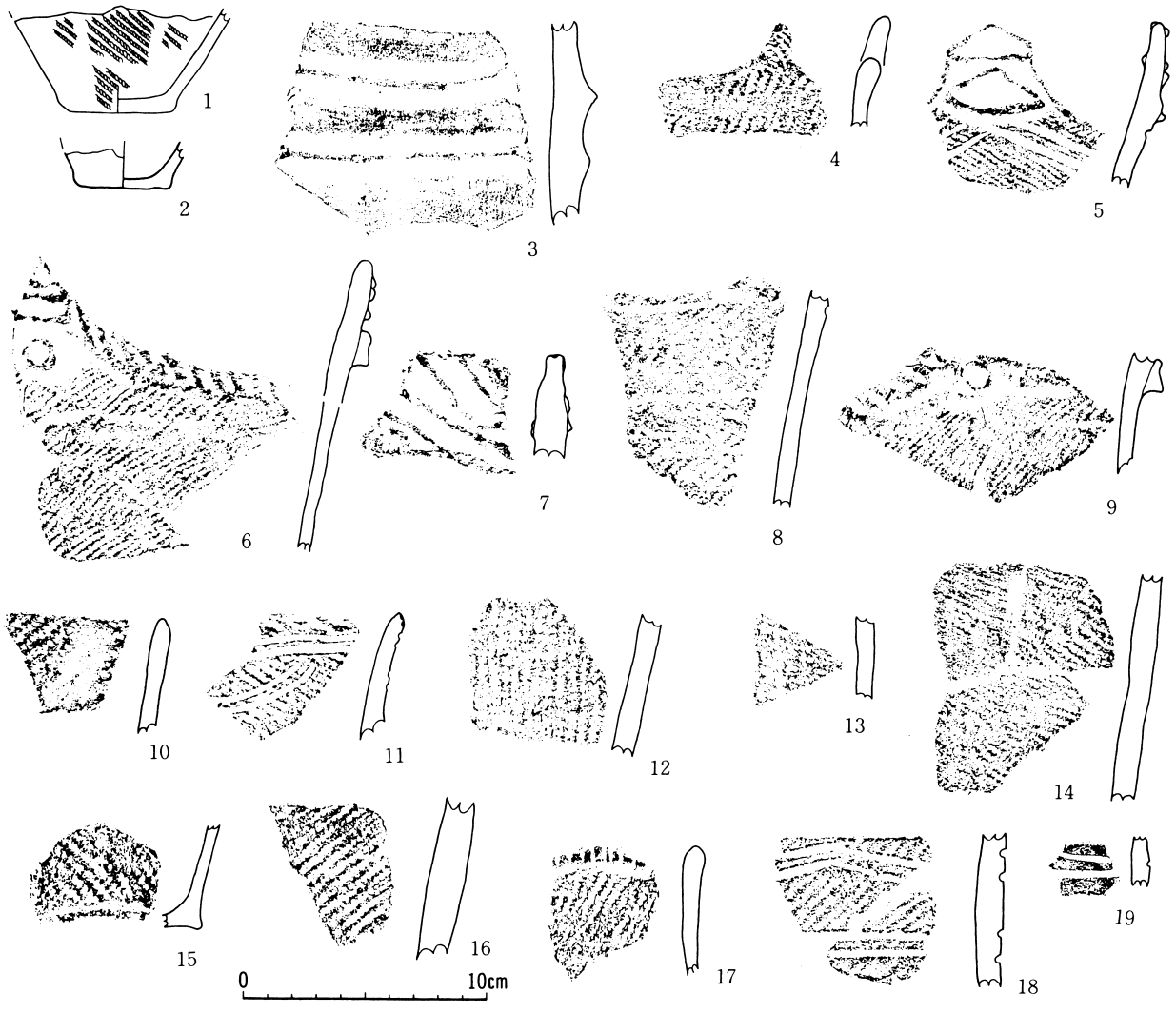
No.	器種	部位	出土地点	出土位置	外面文様	分類	備考
1	深鉢	口縁	16H	確認面	LR横位・斜位回転、L単絡１押圧	II c	
2	深鉢	口縁	16H	確認面	粘土紐貼付、沈線	II b	
3	深鉢	口縁	16H	確認面	不整撚糸文横位回転・押圧	II c	
4	深鉢	口縁	16H	確認面	RL横位回転・押圧	II c	
5	深鉢	口縁	16H	確認面	L無節横位回転、沈線、粘土紐貼付	II c	
6	深鉢	口縁	16H	確認面	RL横位回転・押圧、粘土紐貼付	II c	
7	深鉢	胴部	16H	確認面	RL横位回転、粘土紐貼付、指頭圧痕	II c	
8	深鉢	口縁	16H	確認面	LR横位回転・押圧、粘土紐貼付	II c	補修孔有り
9	深鉢	口縁	16H	確認面	LR横位・斜位回転、粘土紐貼付、LR押圧	II c	
10	深鉢	口縁	16H	確認面	LR横位回転、粘土紐貼付、LR押圧	II c	
11	深鉢	口縁	16H	確認面	RL横位回転、粘土紐貼付、RL押圧、沈線	II c	
12	深鉢	口縁	16H	確認面	０段多条RL横位回転・押圧	II c	
13	深鉢	口縁	16H	確認面	LR押圧	I a	
14	深鉢	底部	16H	確認面	LR縦位回転、沈線	II	
15	深鉢	胴部	16H	確認面	貼付隆帯	II	
16	深鉢	胴部	16H	確認面	RL・結節横位回転、粘土紐貼付、指頭圧痕	II c	

図13　縄文時代の遺構・確認面出土遺物(1)



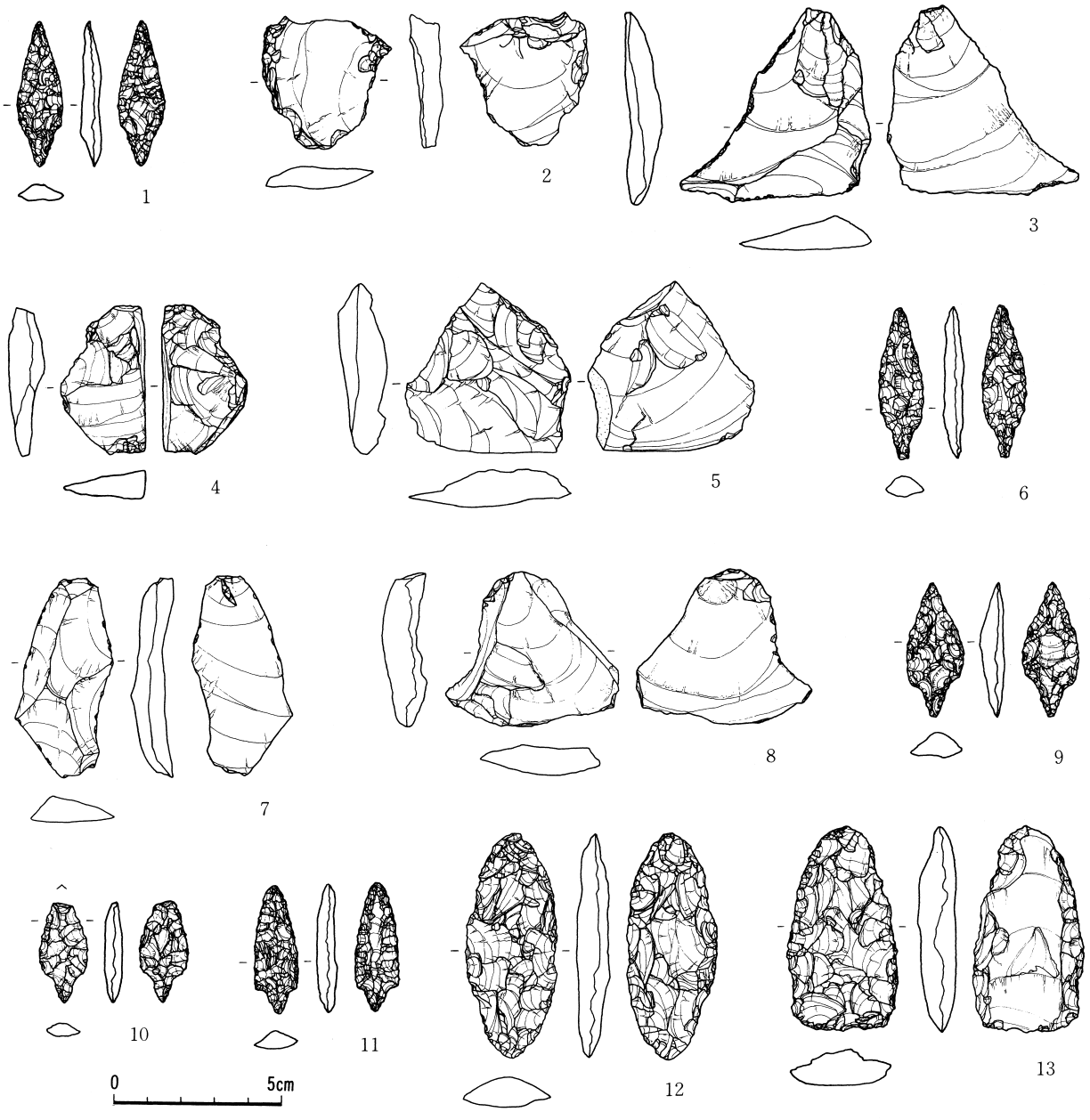
No.	器種	部位	出土地点	出土位置	外面文様	分類	備考
1	深鉢	胴部	18H	確認面	RLR横位回転、粘土紐貼付、指頭圧痕、沈線	Ⅱc	
2	深鉢	口縁	18H	確認面	RLR横位回転、粘土紐貼付、沈線	Ⅱc	
3	深鉢	口縁	18H	確認面	RLR横位回転、粘土紐貼付	Ⅱc	
4	深鉢	口縁	18H	確認面	LR横位回転、沈線、LR押圧	Ⅱc	
5	深鉢	胴部	18H	確認面	RL横位・縦位回転、粘土紐貼付、指頭圧痕	Ⅱc	
6	深鉢	胴部	18H	確認面	縄文回転、沈線	Ⅱc	
7	深鉢	底部	20H	確認面	LR横位回転	Ⅱ	
8	深鉢	口縁	21H	確認面	LR横位回転・押圧、粘土紐貼付	Ⅱc	突起裏面に盲孔
9	深鉢	胴部	21H	確認面	LR横位・縦位回転、粘土紐貼付	Ⅱb	
10	深鉢	口縁	22H	確認面	LR横位・縦位回転、粘土紐貼付、LR押圧	Ⅱc	
11	深鉢	口縁	24H	確認面	LRL押圧・横位回転、粘土紐貼付	Ⅱc	
12	深鉢	口縁	24H	確認面	RL斜位	Ⅱc	
13	深鉢	口縁	24H	確認面	粘土紐貼付	Ⅱc	
14	深鉢	胴部	24H	確認面	R単絡1類縦位、沈線	Ⅱ	
15	深鉢	口縁	24H	確認面	粘土粒・紐貼付、LR押圧	Ⅱc	突起裏面に盲孔
16	深鉢	底部	24H	確認面	LR横位	Ⅱc	
17	深鉢	底部	24H	確認面	RL横位	Ⅱ	

図14　縄文時代の遺構・確認面出土遺物(2)



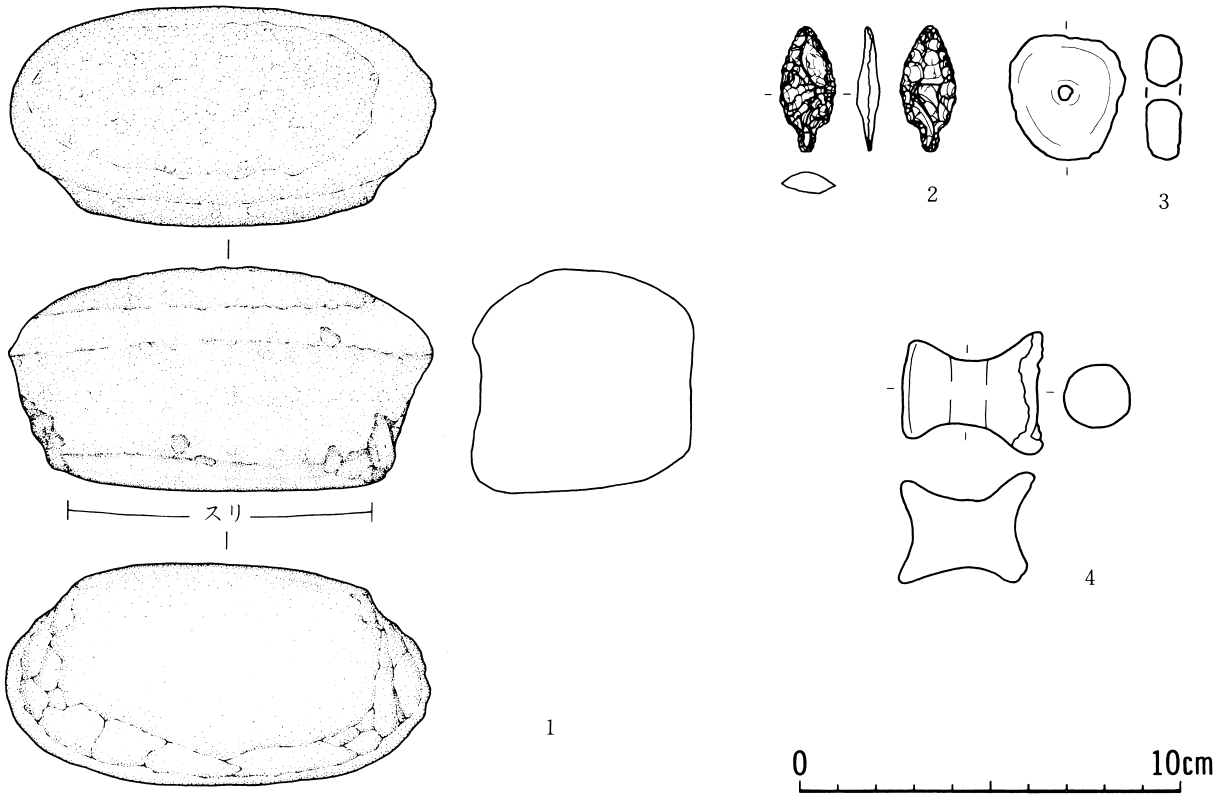
No.	器種	部位	出土地点	出土位置	外　面　文　様	分類	備　考
1	深鉢	底部	24H	確認面	RL横位・斜位回転	II	
2		底部	24H	確認面	無文	II	
3	壺	肩部	25H	確認面	つまみ出し状隆帯	II	
4	深鉢	口縁	25H	確認面	LR横位回転	II c	棒状口縁突起
5	深鉢	口縁	25H	確認面	RL横位回転、粘土紐貼付、沈線、RL押圧	II c	
6	深鉢	口縁	25H	確認面	LR横位回転、粘土粒・紐貼付、RL押圧	II c	
7	深鉢	口縁	25H	確認面	粘土紐貼付	II c	
8	深鉢	口縁	25H	確認面	LR（結２）横位回転、RL押圧	II c	
9	深鉢	口縁	25H	確認面	LR横位回転・押圧、粘土粒貼付	II c	
10	深鉢	口縁	27H	確認面	RL横位回転、LR押圧	II	
11	深鉢	口縁	27H	確認面	RL横位回転、沈線、ヘラ刺突	II c	
12	深鉢	胴部	27H	確認面	RLR横位回転	II	
13		胴部	27H	確認面	RL（結２）回転	II	
14	深鉢	胴部	27H	確認面	RL横位回転	II	
15	深鉢	底部	27H	確認面	RL横位回転	II	
16	深鉢	胴部	9土	確認面	LR横位回転	II	
17	深鉢	口縁	16土	確認面	LR横位回転、L押圧	II c	
18	深鉢	口縁	17土	確認面	LR横位回転、沈線	II c	
19	深鉢	口縁	18土	確認面	沈線	III a	

図15　縄文時代の遺構・確認面出土遺物(3)



No.	出土地点	出土位置	器種	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）	石質	備　　考
1	16H	確認面	石鏃	43.5	14.0	6.5	2.7	珪頁	
2	16H	確認面	不定形	40.0	39.0	10.0	11.0	珪頁	
3	16H	確認面	不定形	57.5	57.0	11.0	16.8	珪頁	
4	16H	確認面	不定形	44.5	25.5	11.0	10.3	珪頁	
5	20H	確認面	不定形	51.0	49.5	15.0	24.7	珪頁	
6	25H	確認面	石鏃	45.5	13.5	6.0	3.1	珪頁	
7	22H	確認面	不定形	60.0	30.0	13.0	13.6	珪頁	
8	24H	確認面	不定形	46.5	52.0	13.0	18.7	珪頁	
9	24H	確認面	石鏃	40.2	17.5	8.0	3.6	玉	
10	25H	確認面	石鏃	(30.3)	14.5	5.0	2.3	珪頁	
11	25H	確認面	石鏃	38.5	13.5	6.5	2.9	珪頁	
12	25H	確認面	石箆	(67.0)	(27.5)	(10.0)	16.7	珪頁	
13	26H	確認面	石箆	61.5	33.0	11.5	22.4	珪頁	

図16　縄文時代の遺構・確認面出土遺物(4)



No.	出土地点	出土位置	器種	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）	石質	備　　考
1	25H	確認面	石冠	59.0	111.5	59.0	107.6	安	
2	16土	確認面	石鏃	33.5	15.0	60.0	2.1	珪頁	

No.	種　　類	出土位置	出土地点	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）	備　　考
3	円盤状土製品	12H	確認面	33.5	28.0	9.0	7.0	土器片利用
4	土製耳飾	16H	確認面	36.0	33.0	16.0	21.0	装着部直径1.8cm

図17　縄文時代の遺構・確認面出土遺物(5)

（縄文時代の遺構のまとめ）

住居跡13軒、土坑18基、竪穴遺構２基検出された。この時期内での遺構の重複は見られなかった。確認面での出土遺物中、最も多かったのは円筒上層ｅ式の土器片である。未精査遺構の時期は、確認面遺物から推定した。これら確認面遺物の解釈上参考となるのが、第14号住居跡の炉体・床面出土遺物と、第18号住居跡確認面の土器片集合部との接合関係例である。近所の埋没途中住居を、不要物の廃棄場所としていたとも読みとれる例である。確認面出土遺物が、その住居の使用期間より確実に新しく、出所も全く別であるとなれば、時期決定上あくまで参考程度にしかなり得ないことになる。今回検出した「円筒上層ｅ式期」とした遺構は、出土遺物の比率より円筒上層ｅ、さかのぼっても上層ｄ式の時期幅内に収まるものと思う。

第２節　平安時代の遺構と遺物

第19号住居跡（図18～19）

［**位置・確認**］　Ｅ区・ＩＢ～Ｃ－119～200に位置する。第Ⅳ層上面において、方形の落ち込みを確認した。主軸方位はＮ－136°－Ｅである。平成７年度に確認・精査した。

［**重複**］　無し。

［**平面形・規模**］　方形の平面形を呈する。規模は南北460cm×東西448cm、床面積は16.78m²である。

［**壁・床面**］　壁の掘り込み面はⅡ層中と思われるが、Ⅳ層まで公園造成時に削平されている。残存高は15cmほどであり、垂直にしっかりと立ち上がるようである。

貼り床は最大で20cmの厚さがある。カマド周辺からPit4・5までの範囲で踏み締まりが強く、北壁よりの床は脆弱で、明瞭ではない。

［**壁溝**］　深さ15～30cm、幅15～30cmで全周する。壁中には径12～40cm、深さ13～47cmの小穴が見られる。小穴は散在するように見えるが、壁の四隅と、カマド側の壁を除く隔壁の中間点に存在するという規則性が見られる。壁板の痕跡は見られなかった。

［**柱穴**］　周溝中の小穴を含めて26基検出された。それぞれの床面からの深さは、Pit1…43.3cm、Pit2…46.2cm、Pit3…55.7cm、Pit4…62.0cm、Pit5…43.0cm、Pit6…22.2cm、Pit7…12.3cm、Pit8…41.9cm、Pit10…29cm、Pit12…51.2cm、Pit13…38.6cm、Pit14…30.6cm、Pit15…33.7cm、Pit16…22.2cm、Pit17…14.9cm、Pit18…43.1cm、Pit19…23.2cm、Pit20…13.3cm、Pit21…47.2cm、Pit22…17.9cm、Pit23…46.6cm、Pit24…40.2cm、Pit25…24.0cm、Pit26…35.8cmである。Pit2・3・4・5が主柱を構成するものと思われる。東西に長い長方形配置をとるようである。壁溝の四隅に位置するPit1・11・13・14・19・20・21と、壁の中間点に位置するPit12・15・16・17・23・24は、力学的に上屋構造に係わるか、壁の構造のみに係わるものかは不明である。

［**カマド**］　東側壁南寄りに検出された。ソデはローム質粘土によって構築されており、芯材に相当するものが見られない。うつ伏せの土師器の坏（図19－５）は、支脚の役割をしていたと思われる。火焼面はカマド内全域に分布する。最も二次加熱の強い部分は、ソデの内壁と、坏を転用した支脚の手前部分である。

煙道は削平されたためか、確認できなかった。

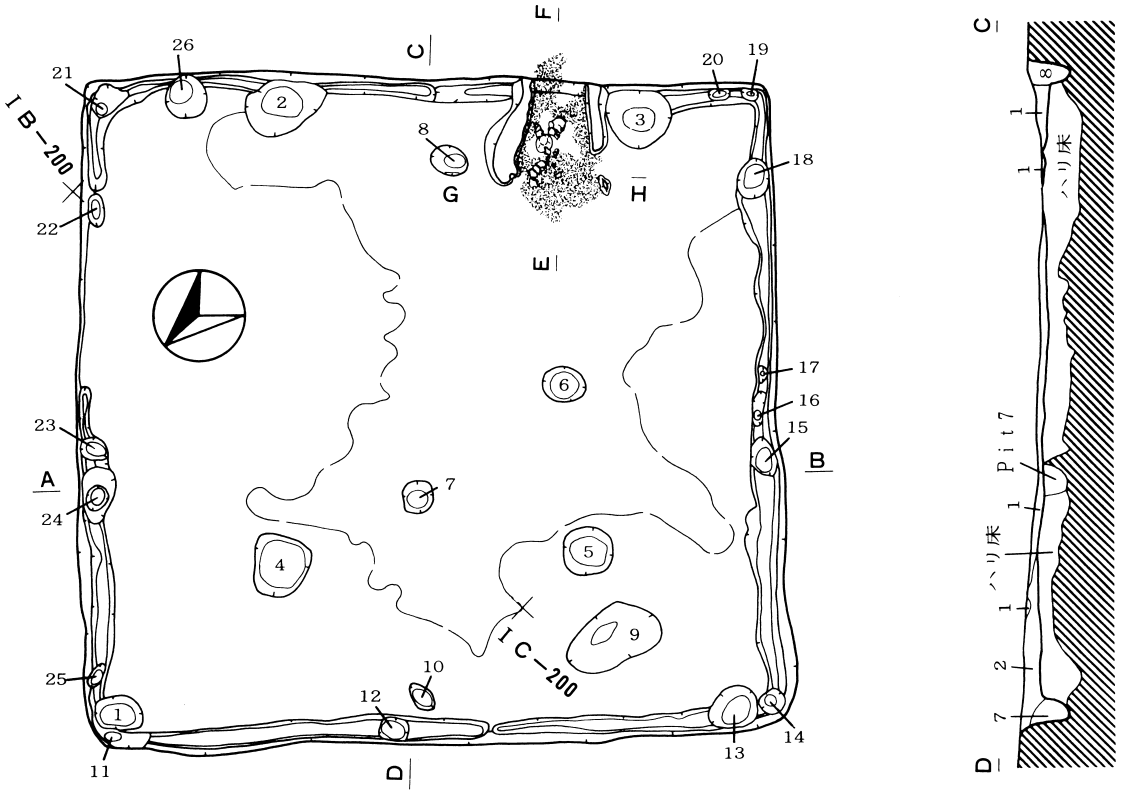
［**堆積土**］　黒色土主体の土層で、４層に分層できた。厚いところで15cm程堆積している。１層は自然堆積の様相を呈している。

［**出土遺物**］　覆土・床面及びカマド内より土師器が出土した。

［**時期**］　カマド及び床面出土の土師器等からみて、所属時期は平安時代９世紀後半から10世紀前半の遺構と考えられる。

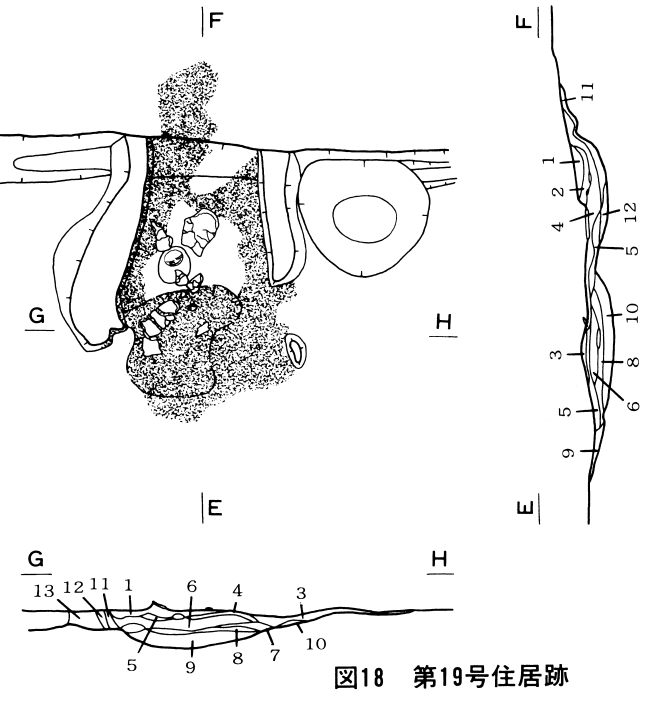
（平安時代の遺構のまとめ）

Ｃ区及びＥ区において、住居跡11軒、土坑１基が確認された。住居跡は49・50年度検出住居群同様、主軸方位に斉一性が見られた。平均値はＮ－128°－Ｅで135°前後が最も多い。第11・13・17号住居跡



１９Ｈ

１層	黒褐色土	10ＹＲ2/2	炭化木片少量。
２層	暗褐色土	10ＹＲ3/3	炭化粒微量。
３層	灰褐色土	10ＹＲ4/2	しまり強い。
４層	黒色土	10ＹＲ2/2	
５層	暗褐色土	10ＹＲ3/4	
６層	暗褐色土	10ＹＲ3/4	しまりなし。
７層	暗褐色土	10ＹＲ3/4	
８層	暗褐色土	10ＹＲ3/4	

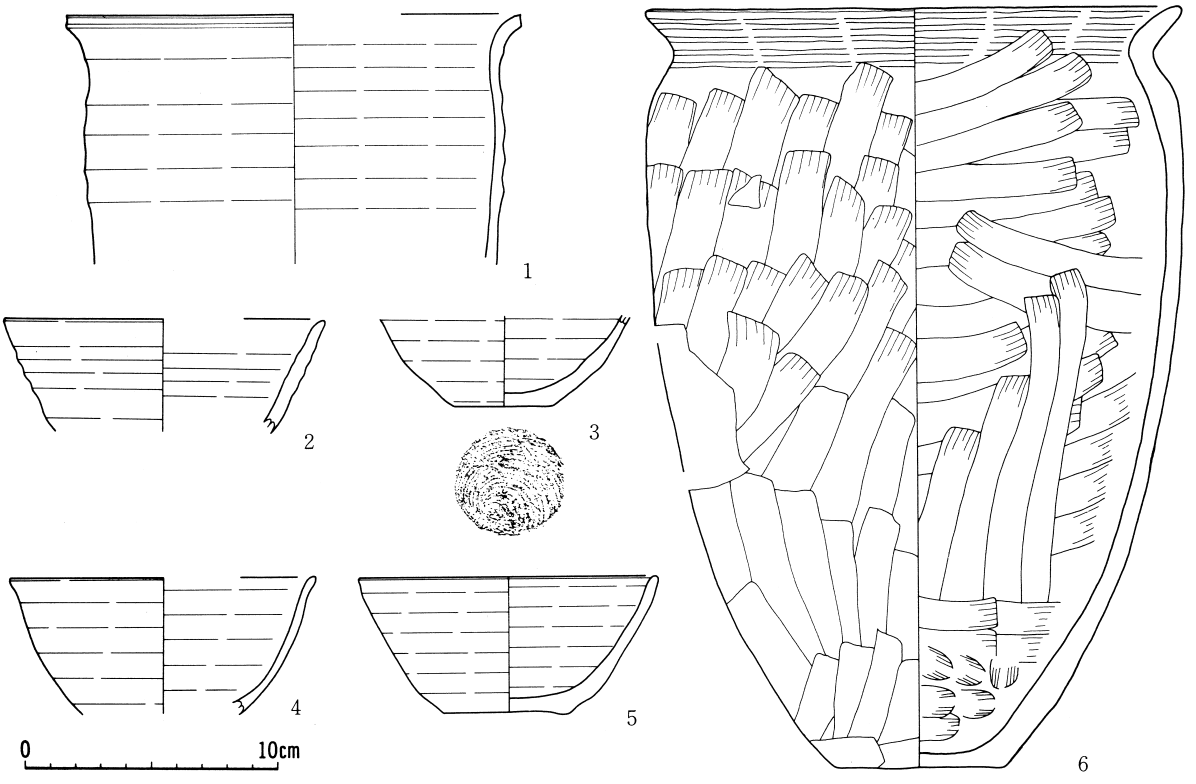


１９Ｈかまど

１層	極赤褐色土	ＹＲ2/2
２層	黒褐色土	10ＹＲ3/2
３層	褐色土	7.5ＹＲ4/4
４層	黒褐色土	10ＹＲ2/3
５層	褐色土	7.5ＹＲ4/4
６層	明赤褐色土	5ＹＲ3/4
７層	褐色土	7.5ＹＲ4/6
８層	暗褐色土	7.5ＹＲ3/3
９層	明赤褐色土	5ＹＲ5/8
10層	赤褐色土	10ＹＲ4/8
11層	暗褐色土	10ＹＲ3/4
12層	赤褐色土	5ＹＲ4/8
13層	にぶい褐色土	10ＹＲ5/4

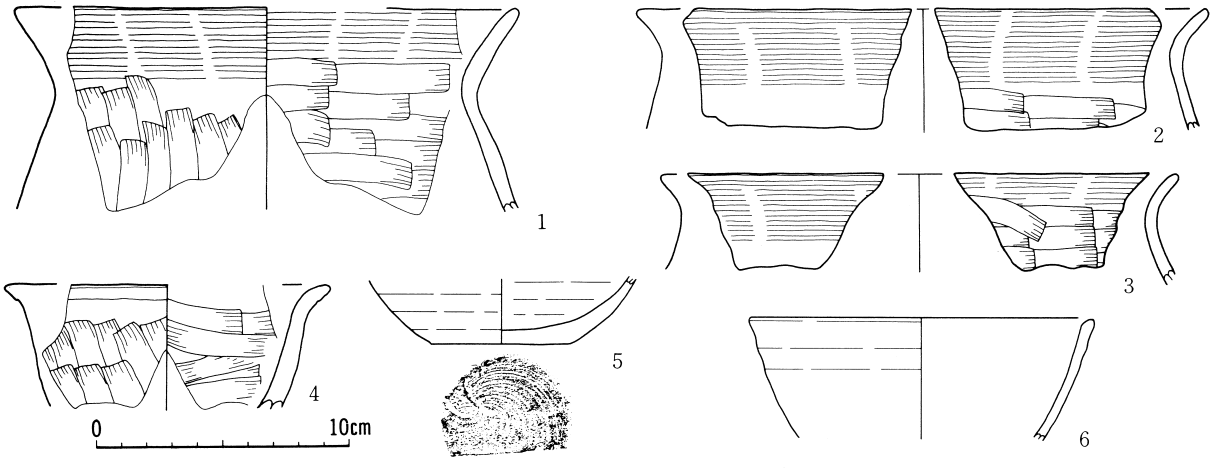
第19号住居跡・カマド

図18　第19号住居跡



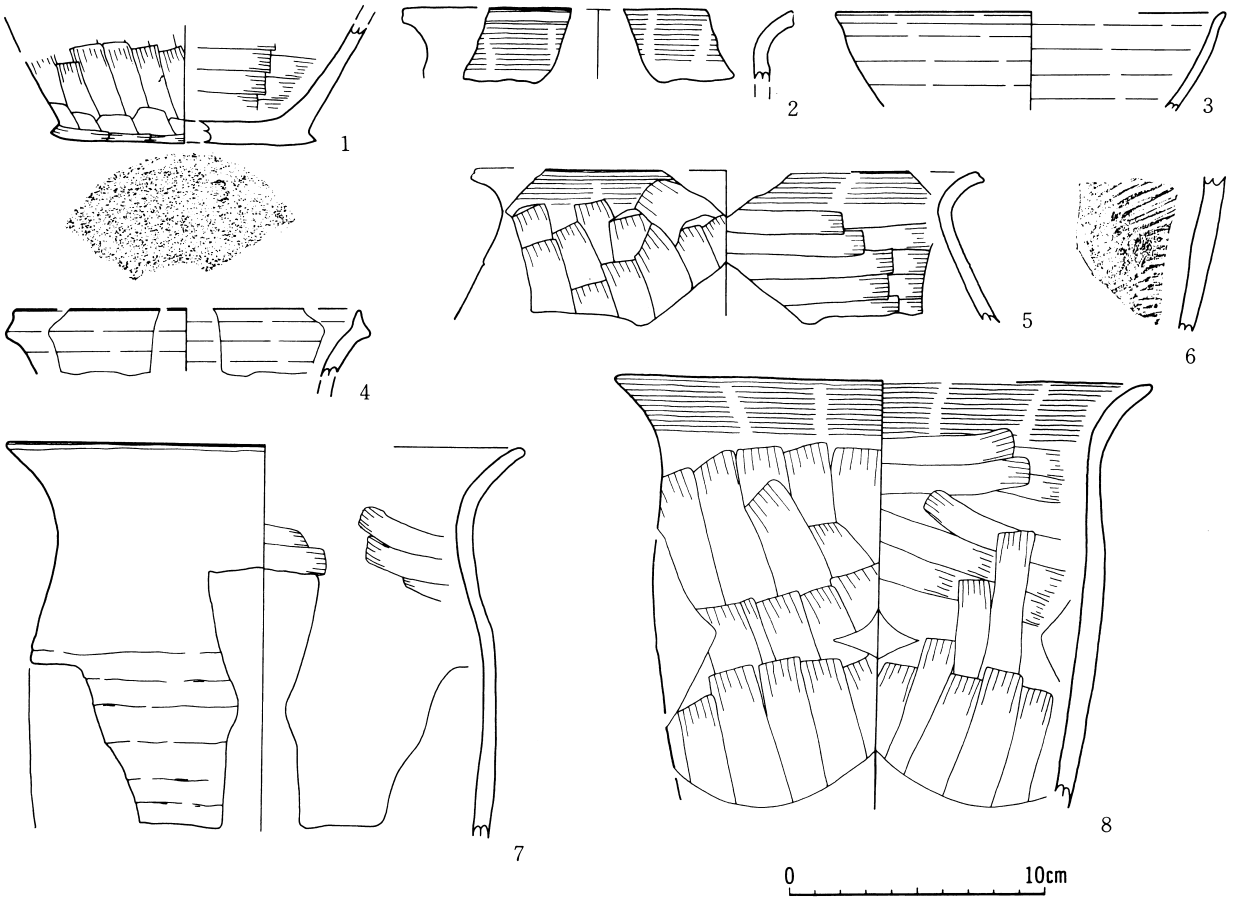
No.	種類	器種	部位	出土地点	層	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	備考
1	土師器	甕	口縁部	19Hカマド		[17.9]	−	(9.7)	ロクロ	ロクロ		
2	土師器	坏	口縁部	19H	2層	[12.6]	−	(4.5)	ロクロ	ロクロ		
3	土師器	坏	胴下半	19H	2層	−	4.0	(3.4)	ロクロ	ロクロ	回糸切	
4	土師器	坏	口縁部	19H	1層	[12.1]	−	(5.4)	ロクロ	ロクロ		
5	土師器	坏	略完形	19Hカマド		11.9	5.0	5.5	ロクロ	ロクロ	回糸切	
6	土師器	甕	略完形	19H	2層	21.2	6.7	30.0	ケズリ、ヘラナデ、ヨコナデ	ヘラナデ、ユビナデ	ケズリ	

図19　第19号住居跡・出土遺物



No.	種類	器種	部位	出土地点	層	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	備考
1	土師器	甕	口縁部	1H	確認面	[19.9]	−	(8.0)	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	−	
2	土師器	甕	口縁部	1H	確認面	[22.6]	−	(4.9)	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	−	
3	土師器	甕	口縁部	1H	確認面	[19.6]	−	(3.9)	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	−	
4	土師器	坏	口縁部	1H	確認面	[13.0]	−	(5.0)	ヨコナデ、ヘラナデ	ヨコナデ、ヘラナデ	−	
5	土師器	坏	胴下半	1H	確認面	−	5.5	(2.6)	ロクロ	ロクロ	回糸切	
6	土師器	坏	口縁部	1H	確認面	[13.7]	−	(4.8)	ヨコナデ、イタナデ	ヨコナデ、イタナデ	−	

図20　平安時代の遺構・確認面出土遺物(1)



No.	種類	器種	部位	出土地点	層	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	備考
1	土師器	甕	底部	2H	確認面	－	10.5	(4.6)	ヘラナデ	ヘラナデ	砂底	
2	土師器	甕	口頸部	2H	確認面	[15.3]	－	(2.8)	ヨコナデ	ヘラナデ	－	
3	土師器	坏	口縁部	11H	確認面	[15.3]	－	3.9	ロクロ	ロクロ	－	
4	土師器	壺？	口頸部	13H	確認面	[13.5]	－	2.6	ヨコナデ	ヨコナデ	－	
5	土師器	甕	口頸部	13H	確認面	[20.0]	－	(6.0)	ヘラナデ	ヘラナデ	－	
6	須恵器	甕	胴部	13H	確認面	－	－	－	平行叩き		－	
7	土師器	甕	口頸部	17H	確認面	[20.1]	－	(15.4)	輪積み痕、ナデ	ヘラナデ	－	
8	土師器	甕	口頸部	17H	確認面	[21.1]	－	(16.7)	ヘラナデ	ヘラナデ	－	

図21　平安時代の遺構・確認面出土遺物(2)

からは煙道部に煙出し甕が確認された。第2・5号住居跡からは覆土内に白頭山苫小牧火山灰と思われる降下火山灰が確認されている。

（各調査区のまとめ）

全ての地区において削平が見られた。平場にⅡ・Ⅲ層が、比較的良く残存するのはＢ・Ｃ・Ｅ区である。Ｃ・Ｅ区以外では遺構は検出されず、遺物の検出も希である。Ａ区はⅡ層が堆積せず、ロームの二次堆積によるⅢ相当層が堆積する。遺物は縄文土器の小片が数点検出されたのみである。Ｂ区はⅡ層が50センチ程残存するが、遺物は極少量である。Ｄ区は調査面積がわずかであるため判別しにくいが、確認された盛土以外の堆積層が極薄いため、未破壊部分は少ないと思われる。Ｆ区は、Ｂ区に近い部分でⅡ層以下が残存するが、他は沢地を除いてⅤ～Ⅵ層まで削平を受けている。

検出遺構一覧

遺構名	グリッド	確認層	年度	重　複	主軸方位	長(cm)	短(cm)	時期	精査	備　　考
1 H	I B-212	Ⅲ	94		N-116° -E	572	420	平安	未	
2 H	I A-211	Ⅲ	94	＞13土	N-132° -E	634	454	平安	未	B-Tm検出
3 H			94							欠番
4 H			94							欠番
5 H	I B-208	Ⅲ	94		N-136° -E	645	502	平安	未	腰板残存。B-Tm
6 H			94							2竪に振り替え
7 H	0 J-216	Ⅲ	94		N-137° -E	370		平安	未	
8 H	0 H-215	Ⅲ	94		N-138° -E	390		平安	未	
9 H	0 D-215	Ⅲ	94		N-139° -E	270		縄文	未	
1 0 H	0 0-205	Ⅲ	94		N-140° -E	260		縄文？	未	
1 1 H	I H-211	Ⅲ	95		N-125° -E	549		平安	未	
1 2 H	I J-211	Ⅲ a	95		N-84° -E	286		平安	未	
1 3 H	I I-212	Ⅲ a	95		N-127° -E	638	510	平安	未	張り出し部有り
1 4 H	I F-210	Ⅳ	95		N-88° -E	420	316	円上e	済	
1 5 H	I G-210	Ⅲ a	95	＜16H		203	188	円上e	未	
1 6 H	I B-209	Ⅳ	95	＞15H		401	320	円上e	未	
1 7 H	I D-207	Ⅲ a	95		N-132° -E	418		平安	未	
1 8 H	I E-210	Ⅲ b	95			415	382	円上e	未	
1 9 H	I B-230	Ⅳ	95		N-137° -E	462	454	平安	済	
2 0 H	I K-211		95			314		円上d ?	未	
2 1 H	0 Q-212		95			452		円上e	未	
2 2 H	I F-208	Ⅲ b	95			229		円上e	未	
2 3 H	I E-209	Ⅲ b	95			388		縄文中期	未	
2 4 H	I F-212		95			314	302	円上e	未	
2 5 H	I C-214		95			384		円上e	未	
2 6 H	0 R-208	Ⅲ b	95		N-122° -E	430		平安	未	
2 7 H	I B-209	Ⅲ a	95			300		円上e	未	
1土	I A-191		94			120	80	榎林？	未	
2土	I A-195		94			156	150	縄文	未	
3土	I A-195		94			138		縄文	未	
4土			94							欠番
5土	I D-211		95			80	76	円上d・e	済	
6土	I D-210		95			87	72	円上d・e	済	チップ多量混入
7土	I B-211		95			100	95	円上d・e	済	
8土	I B-207		95			104	90	円上d・e	済	フラスコ型
9土	I I-210		95			92	88	縄文	未	
1 0土	I B-206		95			140	136	縄文	未	
1 1土	I E-209		95			120		縄文	未	
1 2土	I F-210		95			76		縄文	未	
1 3土	I B-211		95	＞2H		144	124	縄文	未	
1 4土	I F-208		95			34	30	縄文	未	
1 5土	I E-212	Ⅲ a	95			90	86	平安	未	
1 6土	I G-212		95			76	66	縄文	未	
1 7土	I D-212		95			82	58	縄文	未	
1 8土	I D-212		95			76	62	縄文	未	
1 9土	0 R-208		95			49	36	縄文	未	
1竪	I A-205	Ⅲ a	95			240	210	円上e	済	
2竪	I S-211	Ⅲ a	95			210	200	縄文中期	未	

第３章　遺構外の出土遺物

１　縄文時代の遺物

殆どがＣ区からの出土である。Ｂ区及びＦ区は、場所によってプライマリーな黒色土層が残存するが、極少量の土器片しか出土しなかった。

1)　土器

縄文土器については以下のように分類した。

第Ｉ群―縄文時代前期の土器。

ａ類―前期末葉の円筒下層ｄ式に相当すると思われる土器。

第II群―縄文時代中期の土器。

ａ類―円筒上層ｂ式に比定される土器。

ｂ類―円筒上層ｄ式に比定される土器。

ｃ類―円筒上層ｅ式に比定される土器。

ｄ類―榎林式に比定される土器。

ｅ類―最花式に比定される土器。

第III群―縄文時代後期の土器。

ａ類―後期前葉に位置づけられる土器。

量的に最も多くなるのは、II群ｃ類である。次いでＩ群ａ類、II群ｂ類の順で出土している。II群ｂ類は、Ｄ区内沢につながる斜面上、Ｃ区０Q～R-200～202グリッドに相当する狭い範囲に集中している。極少量ではあるが、縄文中期の円筒上層ｂ式（図23－１）、榎林式（図24－10）、最花式（図24－11）と、後期前葉の土器片（図24－12・13）も出土している。

2)　石器

石器は不定形剥片石器（サイドスクレイパー等）が目立ち、次いで敲磨器類が多い。敲磨器類は礫縁辺に敲打・磨面をもつものが若干目立つ傾向にある。他は石鏃、石匙、磨製石斧、北海道式石冠が見られる。図26－２は抉り入り磨製石斧である可能性がある。全体の特徴として、未加工剥片が多いことがあげられる。接合例はなかったが、石材原面の残る例も少なくなかった。

２　平安時代の遺物

殆どがＣ区内からの出土である。時期は全て９世紀～10世紀の範囲内と思われる。

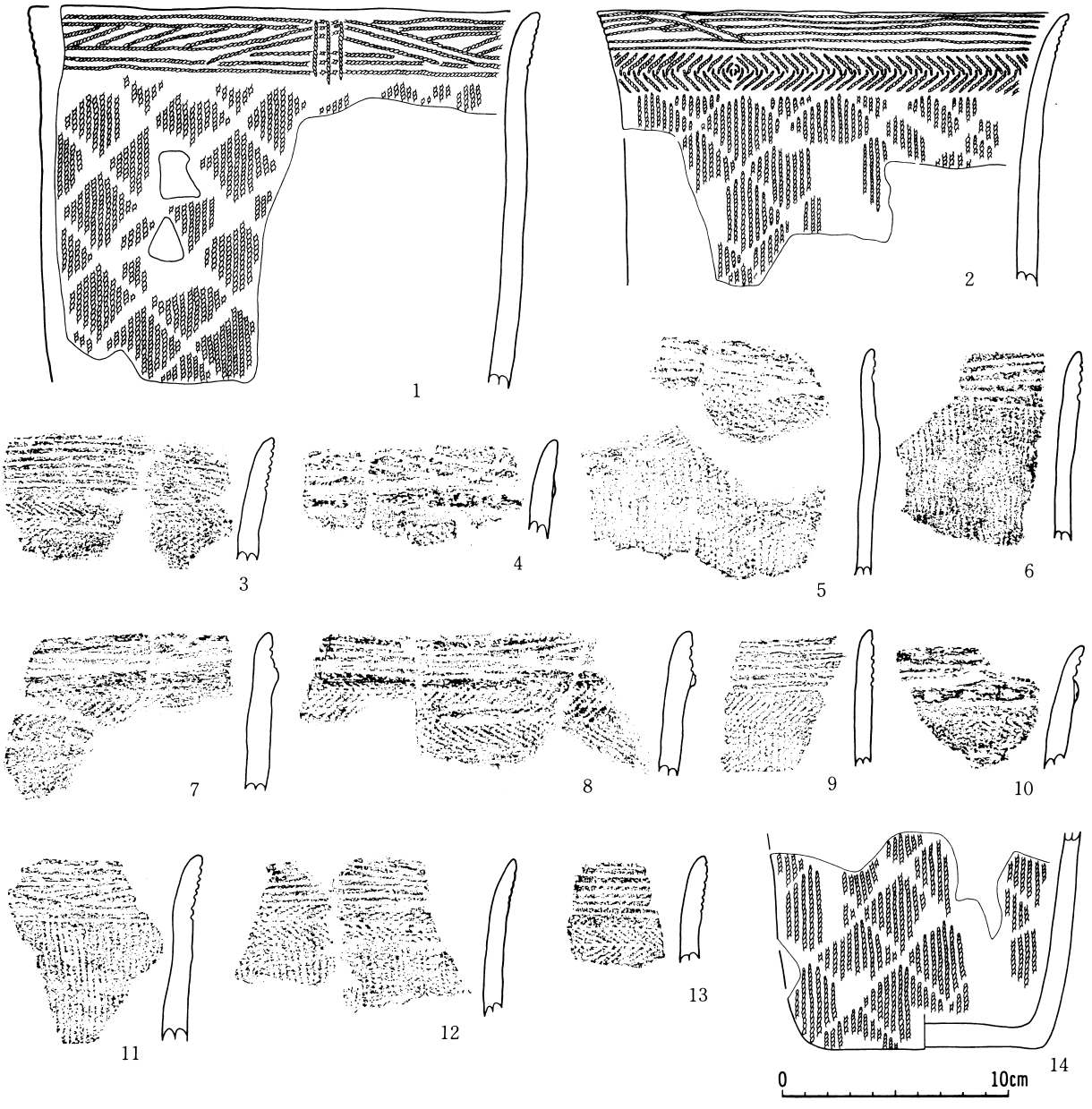
1)　土師器

甕、坏等の器形が見られた。

2)　須恵器

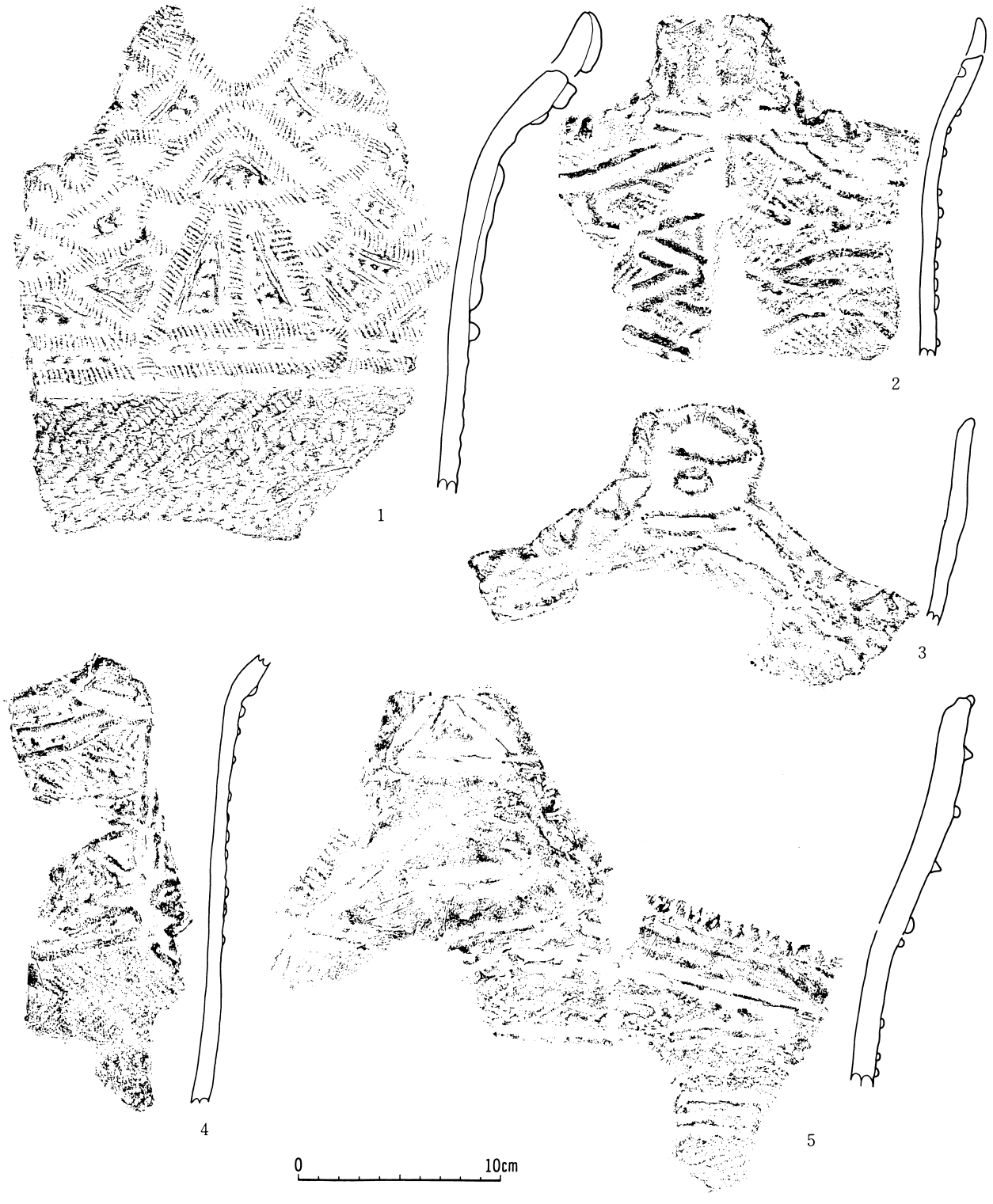
出土量は数十点であるが、甕、小甕、長頸壺等の器形が見られる。ほぼ全てがＣ区からの検出である。甕は、体部片のほぼ全てに自然釉が認められる。

なお、図27－8は体部に「大」の字と思われる刻書が見られる破片である。



No.	器種	部位	出土地点	出土位置	外面文様	分類	備考
1	深鉢	口縁	0R-202	Ⅲ	RL斜位回転、R押圧	Ⅰa	
2	深鉢	口縁	0Q-200	Ⅲa	RL斜位、RL+LR（結1）横位回転、R押圧	Ⅰa	
3	深鉢	口縁	0Q-202	Ⅲa	RL・LR（結1）横位回転、R押圧	Ⅰa	
4	深鉢	口縁	0R-202	Ⅲa	RL横位回転、R（単絡1）押圧、貼付隆帯	Ⅰa	
5	深鉢	口縁	0Q-202	Ⅲa	RLR斜位・LR+RL（結1）横位回転、単絡1押圧	Ⅰa	
6	深鉢	口縁	0Q-202	Ⅲa	LR斜位回転、L押圧	Ⅰa	
7	深鉢	口縁	ⅠA-205	Ⅲa	貼付隆帯、LR横位回転、R押圧	Ⅰa	
8	深鉢	口縁	0P-200	表採	貼付隆帯、LR+RL（結1）横位回転、R押圧	Ⅰa	
9	深鉢	口縁	ⅠG-212	Ⅲa	L単絡1縦位・LR横位回転、L押圧	Ⅰa	
10	深鉢	口縁	0R-202	Ⅲa	貼付隆帯、刺突、RL横位回転、単絡1押圧	Ⅰa	
11	深鉢	口縁	0R-202	Ⅲa	RL斜位回転、R押圧	Ⅰa	
12	深鉢	口縁	0Q-200	Ⅲa	RL斜位、LR+RL（結1）横位回転、L押圧	Ⅰa	
13	深鉢	口縁	0Q-202	Ⅲa	LR+RL（結2）横位回転、R押圧	Ⅰa	
14	深鉢	底部	0Q-202	Ⅰ	RLR斜位回転	Ⅰa	

図22　縄文時代の遺構外出土遺物(1)

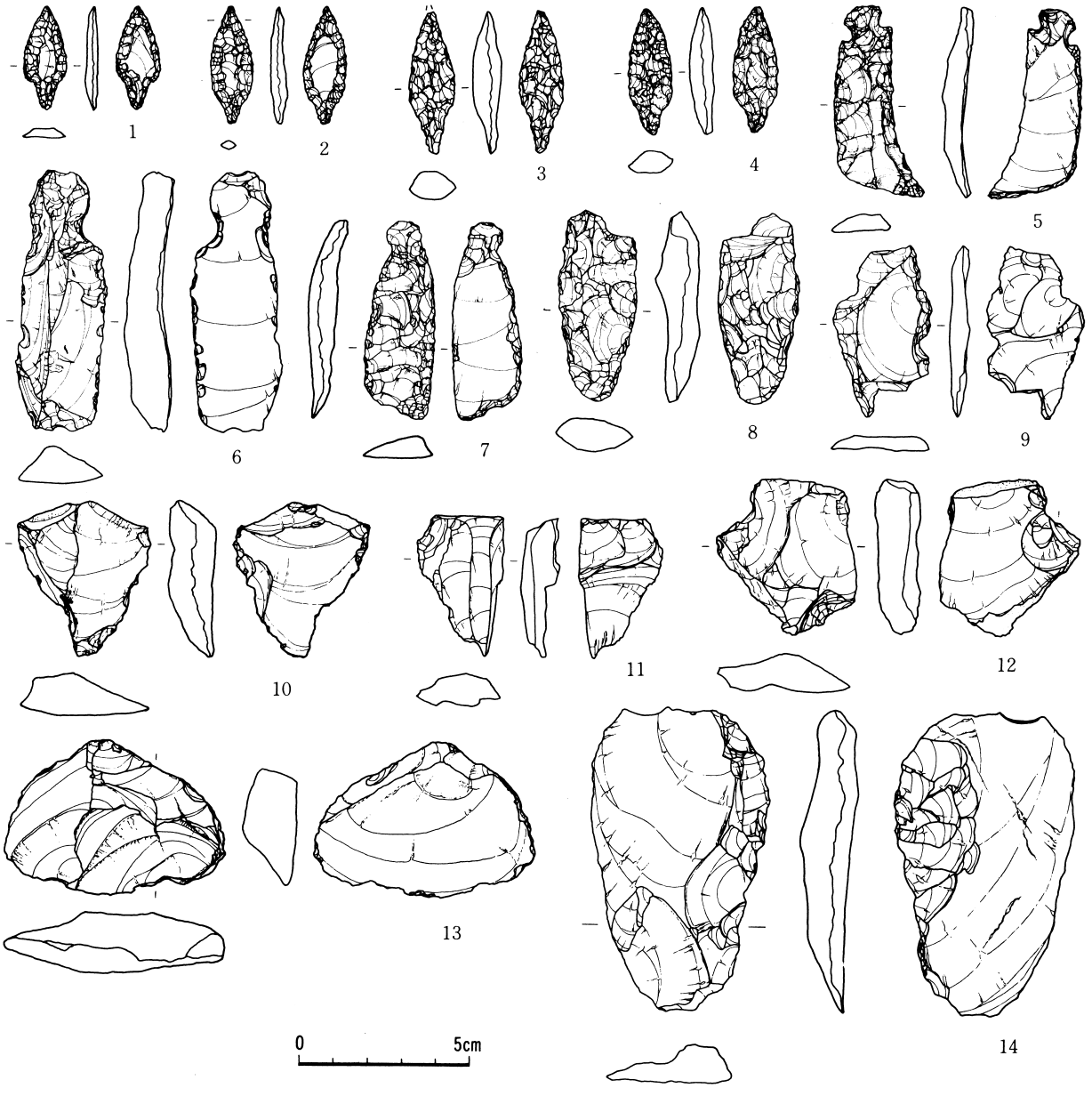


No.	器種	部位	出土地点	出土位置	外　面　文　様	分類	備　考
1	深鉢	口縁	Ｂトレンチ	Ｉｂ	粘土紐貼付、R・L・LR押圧、LR（結１）横位回転	ⅡＡ	
2	深鉢	口縁	風倒木	ⅢＡ	RL横位・縦位回転、粘土紐貼付	ⅡＢ	
3	深鉢	口縁	０Q-202	ⅢＡ	RL横位回転、粘土紐貼付	ⅡＢ	突起裏面に短沈線
4	深鉢	口縁	風倒木	ⅢＡ	LR横位回転、粘土紐貼付	ⅡＢ	
5	深鉢	口縁	０N-202	ⅢＡ	LR横位回転、粘土紐貼付、R押圧	ⅡＢ	

図23　縄文時代の遺構外出土遺物(2)

No.	器種	部位	出土地点	出土位置	外面文様	分類	備考
1	深鉢		ⅠD-210	Ⅲa	LR横位・縦位回転、押圧	Ⅱc	
2	深鉢	口縁	ⅠD-210	Ⅲa	RL横位	Ⅱc	
3	深鉢	口縁	ⅠA-205	Ⅰ	粘土紐貼付、LR押圧・横位・縦位回転	Ⅱc	
4	深鉢	口縁	ⅠD-210	Ⅲa	RL押圧・横位・縦位回転、粘土紐貼付	Ⅱc	
5	深鉢	口縁	ⅠI-211	Ⅲa	粘土突起貼付、LR+RL（結1）横位回転	Ⅱc	突起裏面に短沈線
6	深鉢	胴部	ⅠA-205	Ⅰ	RL横位・斜位回転、RL結節回転、粘土紐貼付、沈線	Ⅱc	
7	深鉢	口縁	ⅠF-212	Ⅲa	RL横位回転、沈線	Ⅱc	
8	深鉢	口縁	ⅠA-205	Ⅰ	LR押圧・横位回転、貼付突起	Ⅱc	
9	深鉢	口縁	ⅠH-212	Ⅲa	LR横位回転、沈線	Ⅱd	
10	深鉢	口縁	0F-207	Ⅰ	複節縄文、沈線	Ⅱd	
11	深鉢	口縁	ⅠA-212	Ⅰ	単節縄文、沈線、棒状刺突	Ⅱd	
12	深鉢	口縁	ⅠR-219	Ⅰ	単節縄文、沈線	Ⅲa	
13	深鉢	口縁	ⅠR-219	Ⅰ	単節縄文、沈線	Ⅲa	

図24　縄文時代の遺構外出土遺物(3)

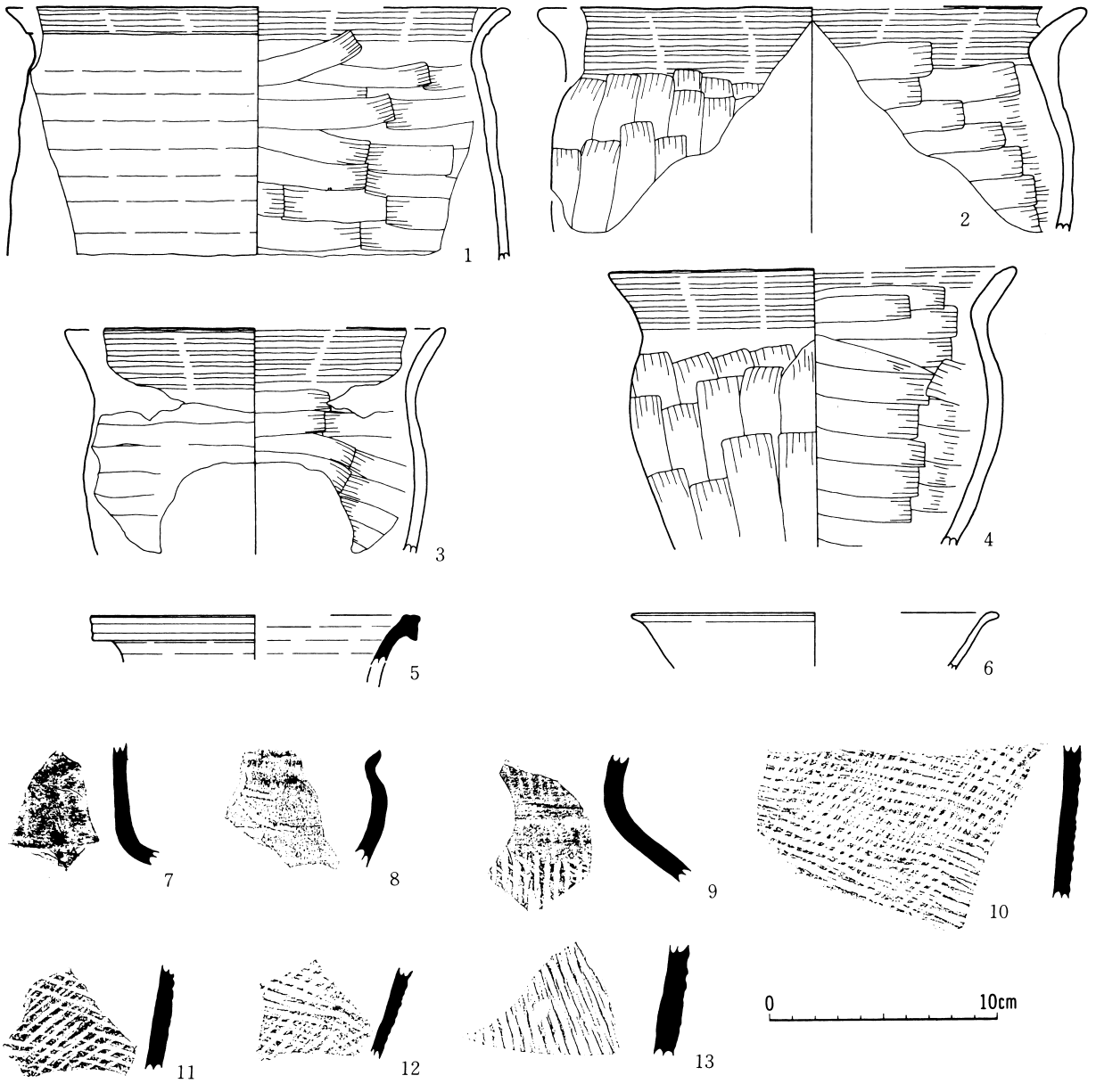


No.	出土地点	出土位置	器種	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）	石質	備　　考
1	ⅠG-209	Ⅰ	石鏃	31.0	13.5	3.5	1.3	玉	
2	ⅠA-205	Ⅰ	石鏃	35.0	13.0	5.0	1.9	珪頁	
3	ⅠK-213	Ⅱ	石鏃	(　43.0)	13.5	9.0	3.6	珪頁	
4	ⅠE-212	Ⅲa	石鏃	38.0	13.5	7.5	3.2	珪頁	
5	ⅠG-212	Ⅱ	石匙	57.0	24.0	14.0	7.5	珪頁	
6	ⅠA-211	Ⅰ	石匙	77.5	27.5	14.0	21.4	珪頁	
7	ⅠC-211	Ⅲa	石匙	58.5	21.0	11.5	9.1	珪頁	
8	ⅠH-215	Ⅰ	石箆	57.0	24.0	14.0	15.0	珪頁	
9	ⅠE-211	Ⅰ	不定形	51.5	29.0	6.0	5.1	珪頁	
10	ⅠH-211	Ⅰ	不定形	46.5	40.0	14.0	19.9	珪頁	
11	ⅠF-213	Ⅰ	不定形	41.5	26.0	12.0	9.0	珪頁	
12	ⅠH-211	Ⅰ	不定形	46.5	41.5	13.5	21.2	珪頁	
13	ⅠB･D-21	Ⅰ	不定形	46.0	65.5	18.0	52.2	珪頁	
14	ⅠE-210	Ⅰ	不定形	90.5	53.0	17.0	55.1	珪頁	

図25　縄文時代の遺構外出土遺物(4)

No.	出土地点	出土位置	器種	長（mm）	幅（mm）	厚（mm）	重（g）	石質	備　　考
1	ⅠE-210	Ⅲa	磨斧	(101.5)	63.0	35.0	382.5	緑凝	
2	ⅠF-211	Ⅲa	磨斧	(119.0)	(84.0)	23.0	261.3	緑凝	
3	ⅠA-211	表	磨斧	103.0	41.0	15.0	90.0	緑細凝	
4	ⅠA-215	Ⅰ	磨斧	(48.0)	20.0	15.0	26.8		
5	0S-209	Ⅲa	磨斧	(19.0)	(13.8)	(9.0)	5.4	緑細凝	
6	0N-210	Ⅱ	石冠	(65.0)	88.0	56.5	421.6	珪頁	
7	0R-206	Ⅲa	敲磨器	(74.0)	52.5	36.0	239.5	石英安	
8	ⅠH-212	Ⅲa	敲磨器	146.0	60.5	48.5	648.9	流	
9	0F-223	Ⅲa	敲磨器	(95.5)	63.5	40.0	375.9	流	
10	ⅠA-213	Ⅲa	敲磨器	73.0	49.5	29.0	113.7	流	

図26　縄文時代の遺構外出土遺物(5)



No.	種類	器種	部位	出土地点	層	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底面調整	備考
1	土師器	甕	口頸部	C区内		[22.0]	－	(11.0)	ロクロ、ヨコナデ	ヨコナデ	－	
2	土師器	甕	口頸部	IB-213	I	[24.0]	－	(12.2)	ヘラナデ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ	－	
3	土師器	甕	口頸部	IC-208	I	[16.5]	－	(10.0)	輪積み痕、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ	－	
4	土師器	甕	口頸部	IG-211		[18.0]	－	(12.5)	ヘラナデ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ	－	
5	須恵器	甕	口頸部	ID-208	I	[14.4]	－	(1.9)	ロクロ	ロクロ	－	
6	土師器	杯	口頸部	IB-208	I	[16.0]	－	(2.5)	ロクロ	ロクロ	－	
7	須恵器	長頸壺	頸部	0F-218					ロクロ	ロクロ	－	
8	須恵器	小甕	口頸部	0Q-202	I				ロクロ、ケズリ	ロクロ	－	「大」字の刻書
9	須恵器	甕	頸部	0P-200	II				平行叩き		－	
10	須恵器	甕	胴部	ID-208	II				格子目叩き		－	
11	須恵器	甕	胴部	0S-204	I				格子目叩き		－	
12	須恵器	甕	胴部	0A-215	I				格子目叩き		－	
13	須恵器	甕	胴部	00-200	II				格子目叩き		－	

図27　平安時代の遺構外出土遺物

第４章　自然科学的分析調査の成果

第１節　遺跡周辺の地質と地形

青森県立板柳高等学校教諭　山　口　義　伸

青森平野は陸奥湾南岸の、夏泊半島西方にある湾奥部に位置する。平野の背後が八甲田火山の北麓にあたり、西側には平野部と急崖で接する火山性丘陵地が分布する。青森平野には八甲田火山に源を発する入内川・堤川（荒川）・横内川・駒込川などが流れ込む。平野への出口である南部には扇状地を形成し、湾岸沿いには三角州が展開する。また、新城川（新田川）・沖館川などは西方の火山性丘陵地（西部丘陵地）に源を発し北東流して陸奥湾に注ぐ。なお、入内川は西部丘陵地の崖下をほぼ南北に延びる入内断層（活断層研究会、1991）に沿って北流する構造谷をなす。入内断層は平野部側が沈降するという構造盆地の要因をなす大規模な活断層であって、北部の海岸部ほど落差が大きく約800ｍに達するといわれる。

図１には青森平野北西端における等高線図を示した。新城川、沖館川は西部丘陵地を北流したのちに平野部で北東流し陸奥湾奥の青森湾に注ぐ。新城川北方の天田内川は梵珠山系の馬ノ神山に源を発しほぼ東流して青森湾に注ぐ。

新城川以北の平野部分は標高５ｍ以下であって、約２kmの幅で陸奥湾に平行して発達する。湾奥部にあっては標高５ｍ以下の等高線の間隔がかなり広くなり、湾岸沿いには沖積低地としての三角州が展開する。そして、およそ標高2.5ｍ付近には湾岸に沿って砂堤が分布する（水野・堀田、1982）。西部丘陵地では標高40ｍ以高の等高線が大きく入り組み浸食谷流域では等高線が混み入り開析が進んでいることを物語る。しかし、全体的には等高線の間隔がやや広いことからなだらかであり尾根部分も間隔が広く平頂な感じを受ける。新城川以南から沖館川周辺にかけての西部丘陵地縁辺部では標高５ｍと10ｍの間隔が狭く平野部に急傾斜するが、標高10～20ｍの等高線の間隔がやや広く入り組みも少ない。全体的に平野部に向かう緩やかな傾斜面である。

ところで、平野部の背後にある山麓部及び西部丘陵地は主に基盤岩を不整合に覆う２枚の火砕流堆積物から構成され、いずれも北八甲田山北東麓に位置する田代平カルデラの形成に起因すると考えられている。流下した時期は八甲田第１期火砕流堆積物は今から約65万年前に、八甲田第２期火砕流堆積物は約40万年前と推定されている(村岡・長谷、1990)。なお、入内断層によって沈降した青森平野下でもボーリングによって２枚の火砕流堆積物と思われる凝灰岩が確認されている。

西部丘陵地周縁にはおよそ３段の段丘が分布する。高位段丘に相当する豆ノ坂段丘（中川、1972）は標高60～80ｍで、開析度が大きく断片的な分布を示す。中位段丘は標高20～50ｍで、縁辺部において湾岸に平行する形で分布する。この段丘は赤褐色の粘土質火山灰からなる三内火山灰(中川、1972)を載せる。火山灰層の最下部には薄層の黄灰色細粒軽石があり、中位段丘の指標である洞爺火山灰に比定される。この火山灰は洞爺湖形成に起因する約12万年前の噴火によるものである。最下位の低位段丘は標高10～18ｍで、沖館段丘（中川、1972）と呼ばれ主に三内－石江付近に分布する。やや起伏が認められ平野部に緩く傾斜し、中位段丘とは比高約10ｍ以上の段丘崖で接する。ただ、細越付近で

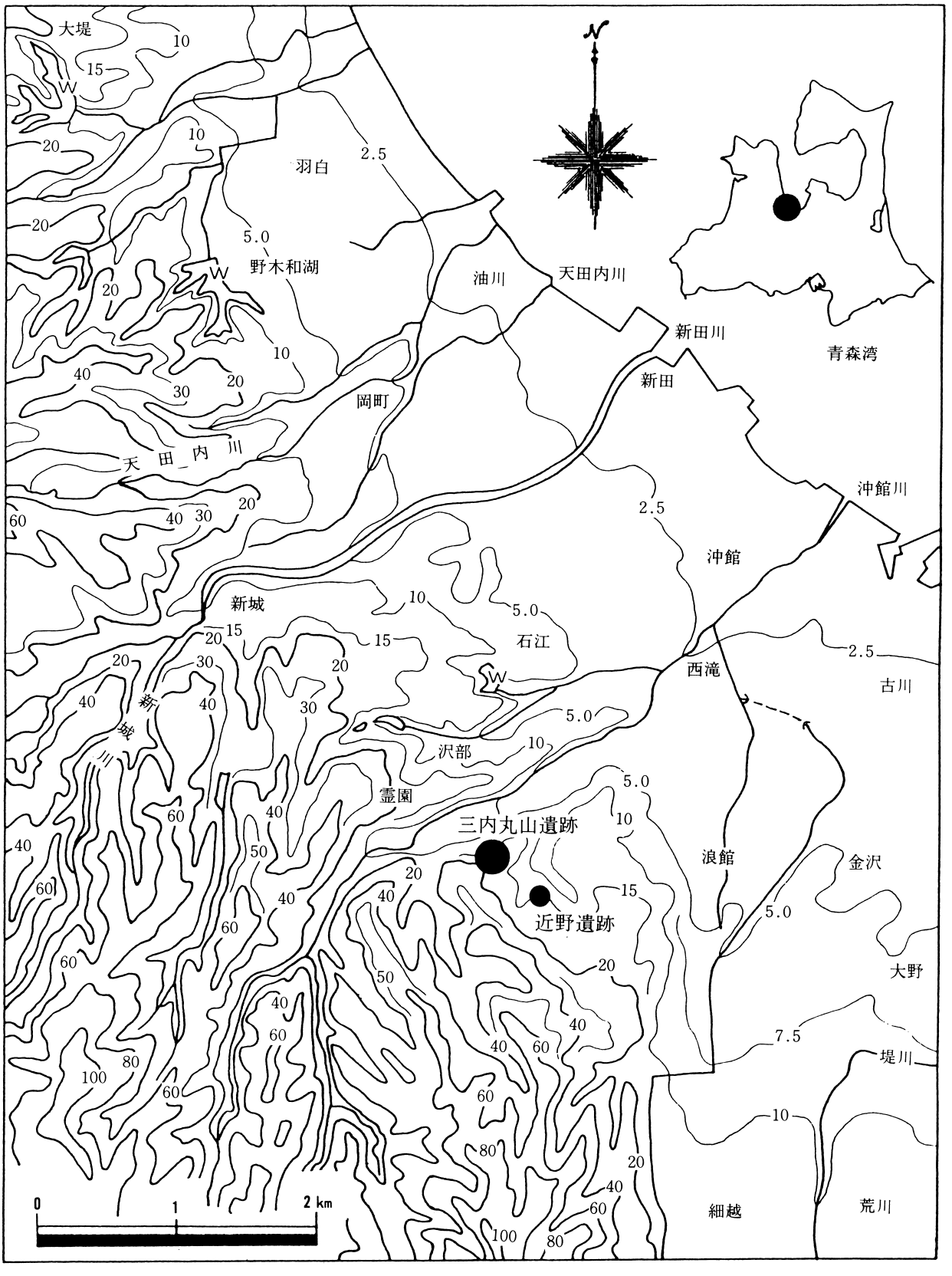


図28　遺跡周辺の等高線図

は平野部に向かって大きく傾斜する。低位段丘に載る火山灰は主に黄褐色ラピリ（砂粒状の火山礫）質軽石層で、千曳浮石（東北地方第四紀研究グループ、1969）と呼ばれ、十和田火山起源のもので11,000～12,000年前の噴火によると推定される。なお、低位段丘前縁には段丘面とほぼ連続する扇状地性の傾斜面がみられる。

本遺跡は青森市街地の南西方約4km地点に位置する。図2に示したが、この付近は沖館川と平野西縁を延びる入内断層の構造谷とに挟まれた三角地帯であって、西部丘陵地の外縁に中位段丘、低位段丘そして扇状地が分布する。中位段丘面は西部丘陵地にほぼ連続し、低位段丘面は前縁の扇状地面とほぼ連続するが、背後の中位段丘面とは比高10m以上の急峻な段丘崖で接する。これらの地形は沖館川によって大きく浸食され、流域には谷底平野が展開する。そして、湾岸沿いの平野部には低平な三角州が展開し、その西縁部には南北に伸びる入内川によると思われる旧河道跡が認められる。

本遺跡は沖館川南岸に展開する河成の低位段丘上に立地する。南縁には開析の進んだ中位段丘がほぼ南北に帯状に分布し、低位段丘面とは約18mの急峻な段丘崖で接する。調査区域の標高は14～18mとやや高低差があるが、これは沖館川に流れる小谷の谷頭付近で分流した沢の浸食作用によるものと思われる。調査区域のＦ区で確認したが、遺跡内を流れる谷頭付近での小さな沢は公園整備により厚い盛り土で埋積されている。なお、北西方に隣接する三内丸山(２)遺跡も沖館川に臨む低位段丘上に立地する。沖館川には比高７～８ｍの急崖で臨み、沖館川に流れる小谷「北の谷」をほぼ中心に縄文時代前期～中期の遺構が密集して検出された。また、三内丸山(２)遺跡では上述した沢のうち最も北側を流れる小さな沢を「南の谷」と呼び、沢の北斜面から同時期の盛土遺構などが検出された。

次に、本遺跡の調査区域内における基本層序について記述する。調査区域は公園整地によりかなり削平されている。ただ、小さな沢筋にあたるＣ区東側及びＤ区付近は標高14～15ｍと低く堆積物から判断して湿地性環境を示し、土層の攪乱が比較的少なく基本土層が把握しやすい。同じくＦ区で確認された沢跡では厚く埋積された盛り土の下に草本植物の未分解の茎などを層状に挟む黒泥層が堆積している。なお、土層の記述にあたってはＢ区ⅢＢ－213グリッド及び低地での堆積状況とを勘案して行なった。図30には調査区域内の土層の模式柱状図を、図5には調査区域内のセクション図を示した。

Ⅰａ層　黒褐色土（10YR2/2）　厚さは平均的に５～10cmであるが低地側ではやや厚さを増す。耕作あるいは公園整備の整地された土層と思われる。かたさはあるが締まりに欠け、乾くとサイコロ状の割れが目立つ。軽石粒及び粘土粒、炭化粒などの混入が非常に目立つ。

Ⅰｂ層　黒褐色土（10YR3/2）　厚さ20cm。整地前の耕作土と思われる。粘性・湿性が多少あり、全体的に締まりに欠けややソフトな感じがする。径20mm以下の軽石粒がかなり混入し、また粘土粒の混入も多少認められる。

Ⅱ　層　黒色腐植質土（10YR1.7/1）　厚さ５～15cm。全体的に腐植質でやや粘土質でもある。かたくて多少締まっている。軽石粒や粘土粒などの混入がきわめて少ない。本層上部には、白頭山起源の苫小牧火山灰（Ｂ－Ｔｍ）、下位に十和田ａ降下火山灰（Ｔｏ－ａ）の２枚の細粒火山灰を挟むことがある。いずれもレンズ状あるいは小ブロック状の堆積を示す。特に、平安時代の竪穴住居跡などの覆土に堆積したりして密接な関係をもつ。

Ⅲ　層　暗褐色土（10YR3/4）　厚さ10～20cm。漸移層である。粘性・湿性があり、かたさ及び締まりにやや欠けている。下位の第Ⅳ層の混入状況によって細分される。下位のⅢｂ層はブロック状の混

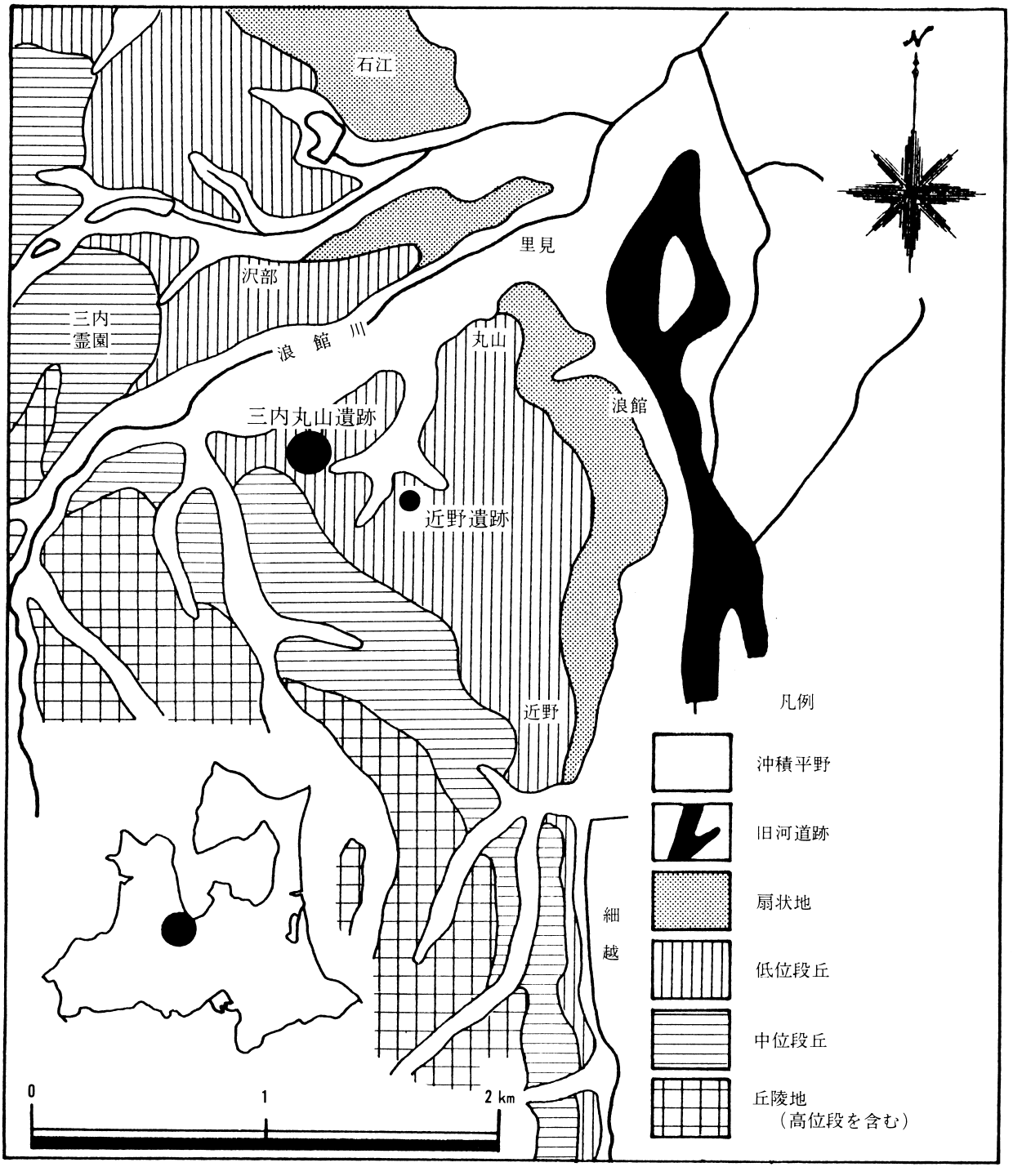


図29　遺跡周辺の地形分類図

入が目立ち全体的に軽石質である。上位のⅢａ層は軽石粒が多く混入し全体的に土壌化が進み色調が暗い。このⅢａ層中には縄文時代前期の遺物包含層と思われる。なお、高度の低いＣ区東側及びＤ区では本層全体がやや粘土質であって、部分的に砂質粘土となっている。全体的にかたく締まっている。

Ⅳ　層　暗黄灰色軽石質火山灰　厚さ約50cm。一次的堆積を示す層相は緻密堅固なラピリ質火山灰で径２cm以下の軽石粒の混入が目立つ。千曳浮石（東北地方第四紀研究グループ、1969）及び碇ケ関浮石(山口、1993）に比定される。おそらく11,000～12,000年前の降下火山灰で十和田火山起源と推定される。なお、調査区域によっては粘土化した軽石粒を含むやや成層した粘土質砂層となり水成堆積物の様相を呈する。上下各層の堆積と考え合わせると、湿地性の堆積環境を示しているものと思われる。

Ⅴ　層　灰白色粘土　厚さ10cm以上。最上部に酸化帯を有し、赤橙色を呈する酸化の染みが認められる。

引用参考文献

東北地方第四紀研究グループ　1969　東北地方における第四紀海水準変化
日本の第四系　地団研専報 No.15
中川久夫　1972　青森県の第四系　青森県の地質 第二部　青森県
岩井武彦・大久保貢・沢田庄一郎　1982　５万分の１表層地質図「青森西部」及び
同説明書　土地分類基本調査「青森西部」　青森県
水野裕・堀田報誠　1982　５万分の１土地分類図「青森西部」及び同説明書
土地分類基本調査「青森西部」　青森県
井関弘太郎　1983　沖積平野　ＵＰ Earth Science　東京大学出版会
村岡洋文・長谷紘和　1990　黒石地域の地質　地域地質研究報告(5万分の1地質図幅
及び同説明書）　地質調査所
活断層研究会編　1991　新編日本の活断層　分布図と資料　東京大学出版会
山口義伸　1993　平川流域での十和田火山起源の浮石流凝灰岩について　年報 市史ひ
ろさき　No.２　弘前市
青森県教育委員会　1993　三内丸山(２)遺跡Ⅱ（第１分冊）　県埋文報 No.157

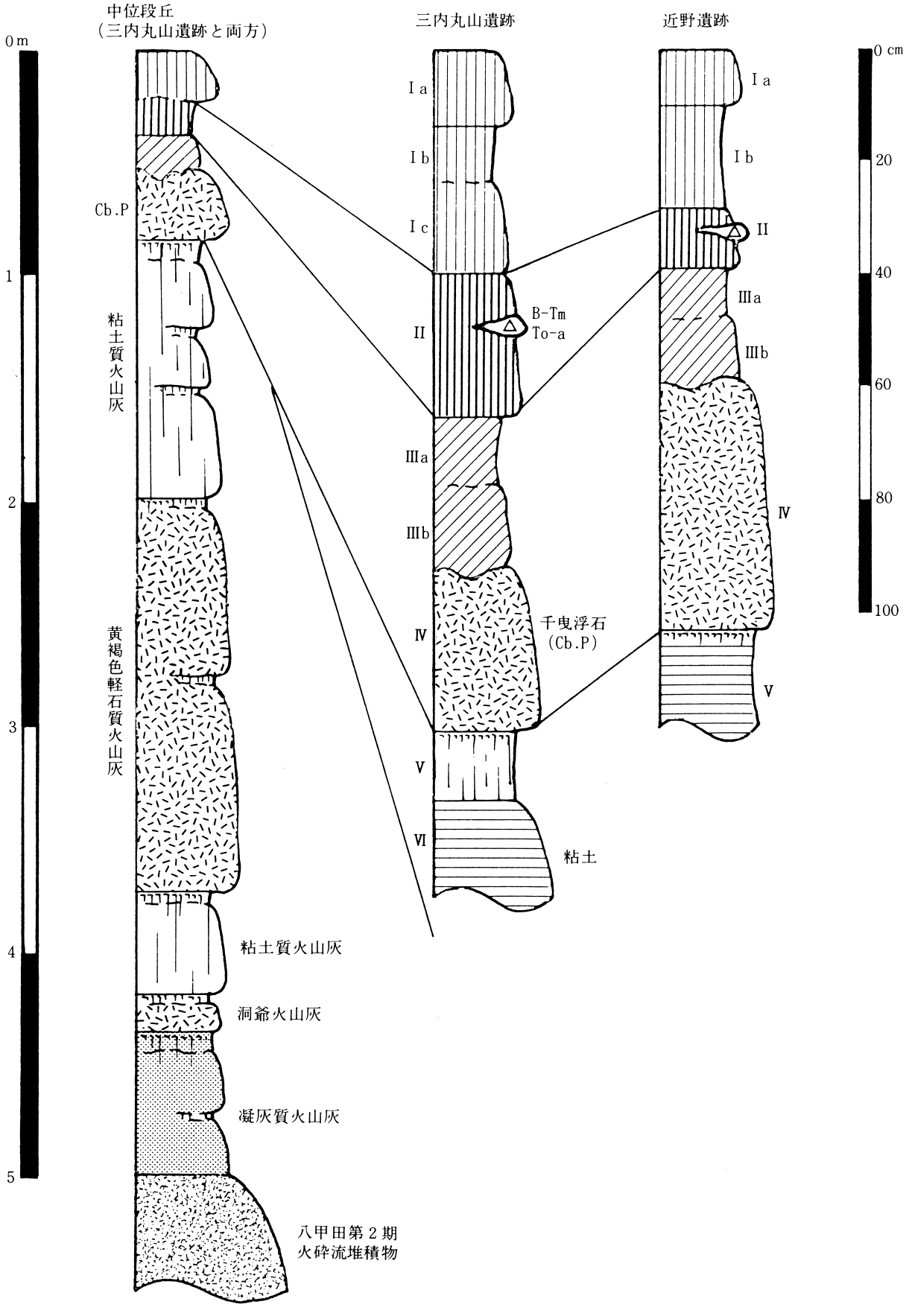


図30　遺跡周辺の土層の模式柱状図

まとめ

平成６年度及び７年度の試掘調査で検出された遺構は、住居跡24軒（縄文13、平安11）、土坑18基（縄文17基、平安１基）、竪穴遺構２基（縄文）である。遺物はダンボール箱で21箱分出土した。

土器は、縄文土器と土師器・須恵器が出土した。縄文土器は、前期の円筒下層ｄ式から縄文後期前葉の土器片が出土している。その時期幅内ではあるが、円筒上層ａ・ｃ式と大木10式併行期の土器は見られなかった。土師器・須恵器は全て９世紀から10世紀前半のものと判断される。

石器は不定形剥片石器（サイドスクレイパー等）が目立ち、次いで敲磨器類が多い。他は石鏃、石匙、石箆、磨製石斧、石皿、北海道式石冠等である。

その他の出土遺物として、耳飾や土器片利用円盤等の縄文時代の土製品、近世の寛永通宝や泥メンコなどが出土した。

近野及び三内丸山遺跡は、県内でも有数の調査密度の高い遺跡である。以下に今回の調査での成果と問題点を、隣接遺跡及び過去の調査成果と関連づけて述べてゆく。今回の調査は、遺構の多くが確認のみの試掘である。そのため、今後の調査の進展によって、時期・性格等の判断に若干の異同があるとは思われる。現時点での中間報告として理解していただきたい。なお、記述上、台地を切り込み、苞部沼に注ぐ各沢を仮称することとする。三内丸山遺跡の「南の谷」と呼ばれる沢をＹＳ１として、台地に沿って西回りに通番して名称づけた。Ｆ区の沢はＹＳ４、Ｄ区の沢はＹＳ５である。台地は「ＹＳ１－２台地」の様に、挟む沢同士で表現した。近野遺跡はＹＳ４－８台地上に形成されている。また、本遺跡との距離を論じる場合、断りのない限り起点は52年度調査（青森県教委　1979）で検出された大型住居（第８号住居跡）とした。

1　近野遺跡の縄文時代集落について

今回までの調査で、近野遺跡の縄文集落部分に相当する、ＹＳ４－５台地のほぼ全面に調査の手が入ったことになる。以下に過去の調査を踏まえて、この台地を中心とした縄文集落の概要を記述してゆく。

1)　居住範囲について

縄文中期の居住域は、ＹＳ４－５台地の平坦部に沿って展開するという所見（青森県教委　1979）は今回の調査でも変更はない。ＹＳ５－６・６－７台地が全く未調査であり今後の調査が期待される。今回の試掘調査のＣ・Ｅ区は、昭和52度調査で検出された縄文中期後半の集落中心部南側に相当する。住居跡の南限は本調査検出の第９号住居跡、若しくは50年度（青森県教委　1977）検出の第131号住居跡が該当すると思われる。

2)　居住時期幅について

今回の調査区で確認された、最も直接的な生活痕跡としてとらえられる住居跡の殆どが、円筒上層ｅ式期及びｄ式期のものと推定される。52年度の調査では最花・中の平Ⅲ式期の住居跡が確認されている。その他の時期は、明確な居住利用痕跡が確認されていない。

3)　空間利用の変遷について

［円筒下層ｃ式期以前］　利用痕跡が認められない。

［円筒下層ｄ式期］　ＹＳ５に続く斜面等に、土器の小規模な集中ブロックとして利用痕跡が認められる。

［円筒上層ａ～上層ｃ式期］　極少量の土器片が残されるのみである。

［円筒上層ｄ式期］　台地先端部に大型住居を中心に居住区域が形成される。この時期と特定できる他の遺構は確認されていない。時期不明の土坑に含まれている可能性もある。

［円筒上層ｅ式期］　居住施設の中心域は、台地先端部から南のＣ区に拡大する可能性がある。フラスコ状土坑と小土坑、竪穴遺構が集落構成要素に加わる。

［榎林式期］　フラスコ状を含む土坑に加えて、性格不明の竪穴遺構が構築され出す。構築範囲は、台地先端からＥ区までである。居住施設と判断されるものは検出されていない。

［最花式期］　再び台地の先端部に居住区域が形成されるが、規模は縮小している。集落構成要素としては若干の竪穴遺構と、掘立柱建物（註１）が新たに加わる訂能性がある。

［大木10併行式期以降］十腰内Ｉ式期に、ＹＳ４－５台地先端部とＹＳ８西斜面に竪穴遺構が形成されるが、住居・土坑等は構築されなくなる。ＹＳ８西斜面にはこの時期の遺物包含層が形成されており、多量の土器が出土している。これ以降は縄文晩期に、ＹＳ４－５台地先端部において少数の竪穴

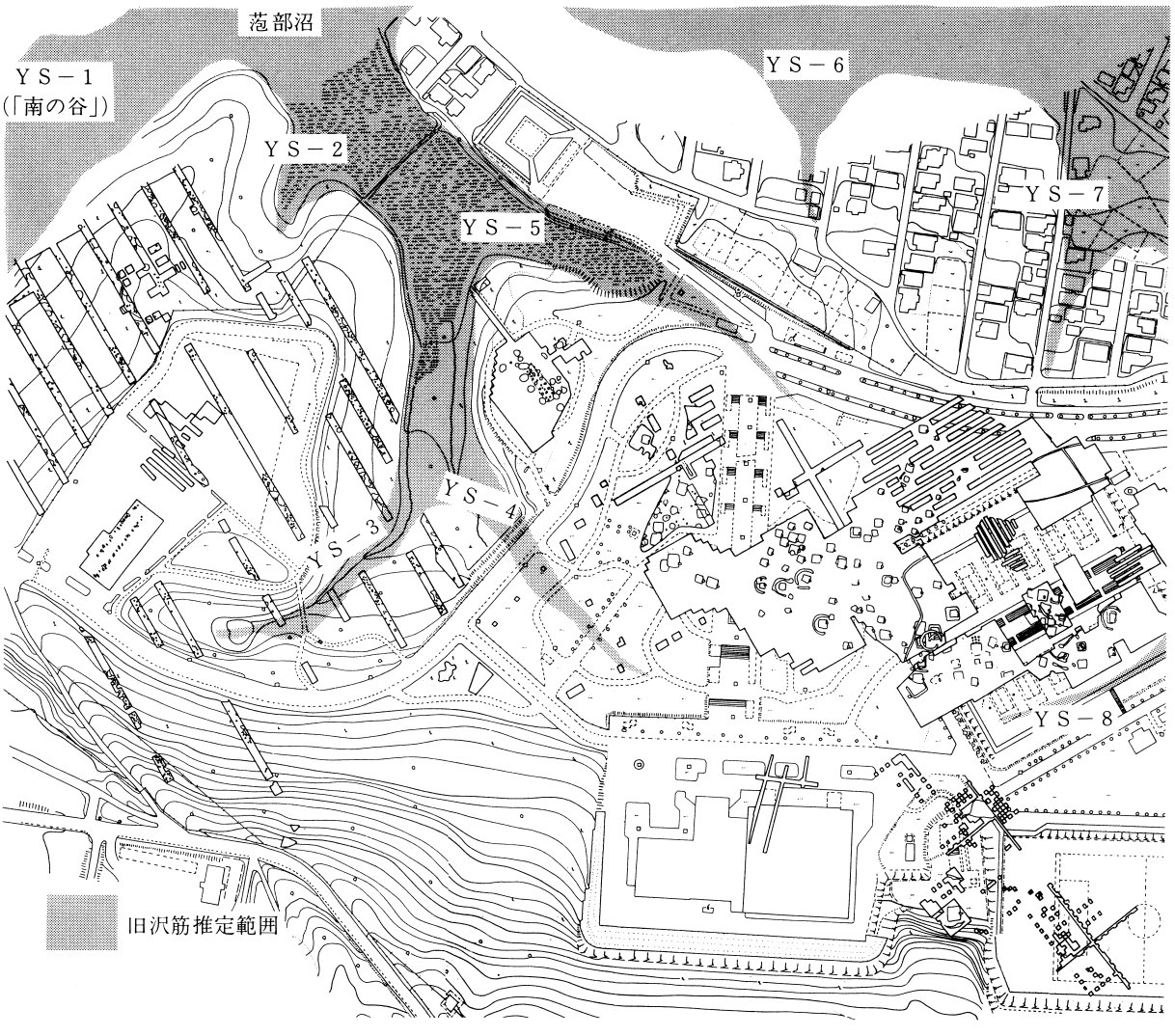


図31　蒡部沼南側の集落立地

遺構が構築されるのみであり、平安時代に至るまで居住利用の痕跡が認められなくなる。

2　三内丸山遺跡との関係について―特に円筒上層ｄ・ｅ式期―

二遺跡間の関係を考えてゆく上で、今後の調査の課題ともなる以下の点が指摘できると思われる。

①距離上の観点から

52年度調査時検出の大型住居跡（第８号住居跡）から、直線距離にして230ｍ程西の、ＹＳ１－３台地上に墓域が確認されている（青森県教　1977)。この台地縁辺に沿って、縄文時代中・後期の住居跡群が確認されており（青森県教　1995ｃ）、ともに三内丸山遺跡として調査されている。住居跡群は一部とぎれる可能性があるが、環状を呈するように見える。近野遺跡第８号（大型）住居跡と環状住居跡群の最短距離はＹＳ２を挟んで100ｍ前後である。ＹＳ４の比高差は３～４ｍ程である。ただし、環状住居跡群は殆どが未精査で正確な時期が不明である。

二遺跡が全く接することから、各距離関係を吟味する必要があると思われる。

②居住時期上の観点から

旧野球場予定地を中心とする、三内丸山遺跡の最拡大期は円筒上層ｄ・ｅ式期である（青森県教　1996ｂ)。これは近野遺跡の住居跡構築数上の最盛期でもあり、居住開始期にも相当する。今回の試掘調査での、遺構確認面遺物の殆どは円筒上層ｅ式であった。将来の本発掘において、各遺構の正確な時期の把握が必要とされる。

③集落構成要素の観点から

集落構成要素の欠落（青森県教　1995ｃ）から想定される依存関係についてである。

昭和49・50年度調査は、ＹＳ４－８台地上の基部のほぼ全面に及んでいるが、縄文中期の墓坑・埋設土器等は検出されなかった。ＹＳ５－６・６－７台地も含め、これら台地上の墓坑・埋設土器等の有無の確認は、将来の調査に期待するところである。

近野遺跡内で欠落する集落構成要素を、仮にＹＳ－８以東に求めると、最低でも400～500ｍは離れることとなる。この延長上の、同時期と思われる周知の遺跡には安田水天宮遺跡があるが、900ｍ程離れることとなる。後背地の丘陵上には、400ｍ南に三内丸山(5)遺跡、600ｍ南に三内丸山(4)遺跡が所在するが、比高差が20ｍ程ある。

同時期の埋葬施設を近隣に求めると、墓坑では上述したＹＳ１－３台地上の土坑墓列、又は450ｍ北西の、里見丸山線予定地（青森市教　1996ｂ）Ａ区で検出された墓坑群となる。同じく埋葬遺構と解釈される埋設土器遺構では、400ｍ北西の三内丸山遺跡・南盛土内埋設土器群が該当する。廃棄施設もここが最短の場所となる。ただし、第14号住居跡と第18号住居跡の土器接合関係と、ＹＳ－４（Ｆ区）の状況等から、近野区域内では、近場の窪み（＝廃絶住居）を廃棄場所として、明確な集中廃棄域を形成しない可能性も考えられる。

以後も近野遺跡内で、欠落遺構が確認されない場合、「共有」の可能性が論じられることとなり得る。三内丸山は、その空間利用のあり方から、少なからず共同体規制を感じさせる集落である。そういった共同体と、公共施設の共有関係をもつ集落であったのかどうかが、今後調査視点に入れられるべきものと思われる。

④集落立地環境上の観点から

立地環境と居住区配置、及び配置上の求心方向に関してである。

ＹＳ２を除く、１から５に区切られた三つの台地上全てに、縄文中期中葉から後期初頭と思われる住居跡が確認されている。近野遺跡は居住区でも蒐部沼よりに住居が密集し、大型住居も造られる。三内丸山遺跡旧野球場部分では、中期中葉期に「南の谷」（＝ＹＳ１）南斜面よりに住居跡が集中してくる傾向がある。また旧小三内遺跡地区も、蒐部沼から沖館川につながる沢筋に面した同時期の居住区及び貯蔵区とされる区域である。集落の求心方向としての蒐部沼との関わりも意識する必要性があると感じられる。

また、当時の各沢筋と、蒐部沼の状況及び沖館川への合流状態の分析・調査も、今後必要となるかと思われる。それらが各居住ブロックの、社会機能上のどの局面を分断し、連繋すると見るかで解釈は大きく異なってくると思われるためである。

以上の観点等から、三内丸山を中心とした遺跡群全体の、有機的な関連づけに配慮しながら今後の調査が進められることが期待される。

（秦　光次郎）

註１　52年度調査時検出の第17号住居跡のことである。報告では、近代の耕作によって壁・床面の消滅した大型竪穴住居跡の可能性も指摘されているが、その後の調査例の増加により、掘立柱建物遺構の可能性が高くなっている。

引用参考文献

青森市教委　1970　『三内丸山遺跡発掘調査報告書』青森市の文化財４

青森県教委　1974　『近野遺跡(1)発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第12集

青森県教委　1975　『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』青森県埋蔵文化財調査報告書第22集

青森県教委　1977　『近野遺跡(Ⅲ)・三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第33集

青森県教委　1979　『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅳ)』青森県埋蔵文化財調査報告書第47集

青森市教委　1988　『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』青森市の埋蔵文化財

青森市教委　1993　『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』青森市埋蔵文化財調査報告書第18集

青森市教委　1994　『小三内遺跡発掘調査概報』青森市埋蔵文化財調査報告書第22集

青森県教委　1995a　『三内丸山(2)遺跡Ⅱ発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第157集

青森県教委　1995b　『三内丸山遺跡Ⅲ発掘調査概報』青森県埋蔵文化財調査報告書第166集

青森県教委　1995c　『三内丸山遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第185集

青森県教委　1996a　『三内丸山遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第204集

青森県教委　1996b　『三内丸山遺跡Ⅵ』青森県埋蔵文化財調査報告書第205集

青森市教委　1996a　『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査概報』青森市埋蔵文化財調査報告書第23集

青森市教委　1996b　『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第28集

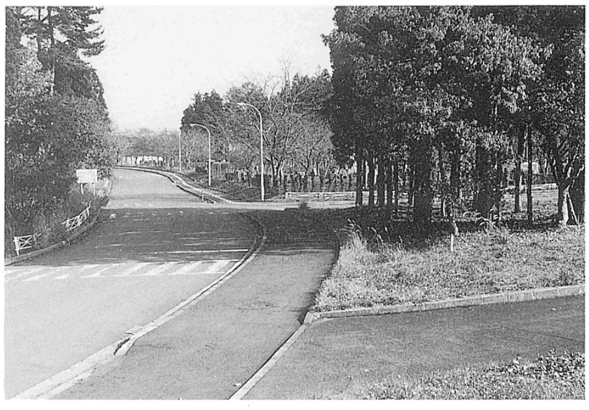
報告書抄録

ふりがな	ちかのいせき　ご
書名	近野遺跡　Ⅴ
副書名	県総合運動公園拡張整備事業に伴う遺跡試掘調査
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第216集
編集者名	秦　光次郎
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター
所在地	青森県青森市大字新城字天田内152－15
発行年月日	西暦1997年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
近野遺跡（ちかのいせき）	青森県青森市（あおもりけんあおもりし）大字安田字近野（おおあざやすたあざちかの）219、外	02201	01065	40度48分28秒	142度42分31秒	19951012～19951114	576m²	県総合運動公園拡張整備事業に伴う遺跡試掘調査
						19960802～19961031	1,600m²	

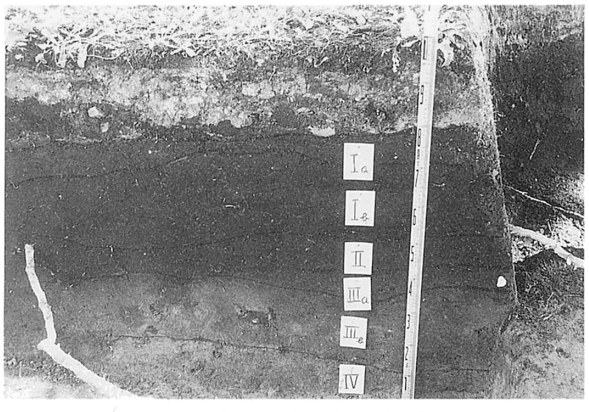
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
近野遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　13軒 竪穴遺構　２軒 土坑　17基	縄文土器（円筒下層ｄ～後期前葉） 土製品（耳飾） 他に石器類	縄文時代集落の主体時期は円筒上層ｄ～ｅ式。
	集落跡	平安時代	竪穴住居跡　11軒 土坑　１基	土師器（坏・甕） 須恵器（甕）	

A区近景（東から）



B・C・D・E区（西から）

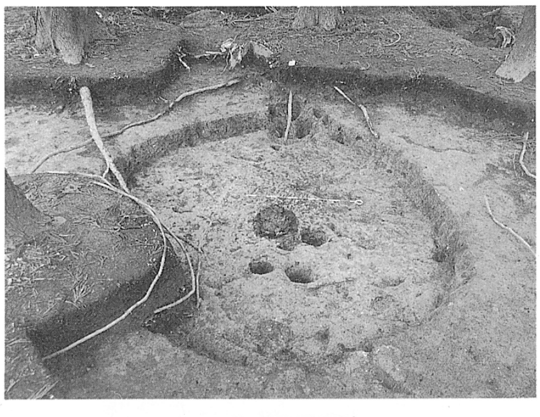
C・E区（北から）



基本土層（B区）

C区・遺構確認状況

C区・円筒下層d式・出土状況

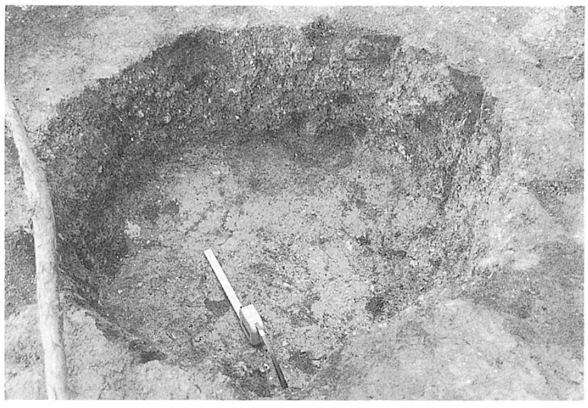


第14号住居跡

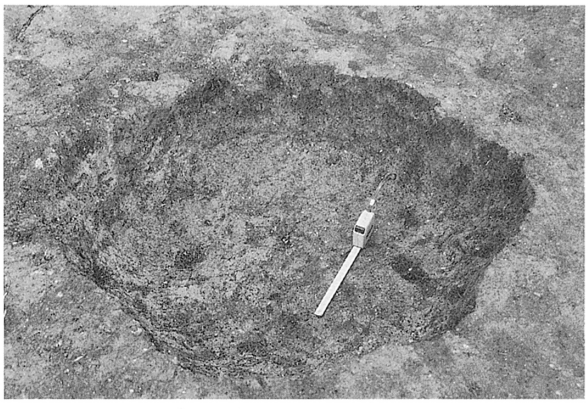
第19号住居跡

遺跡近景・基本層序・住居跡等

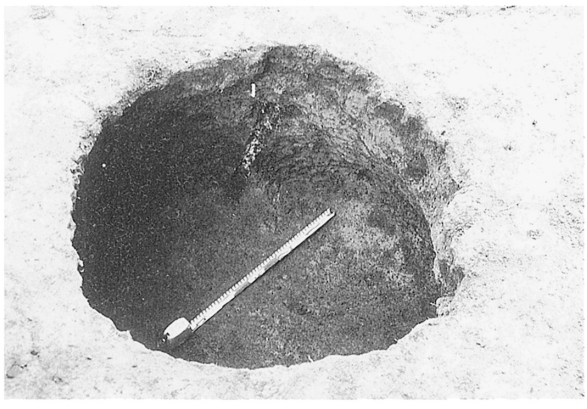
第１号竪穴遺構



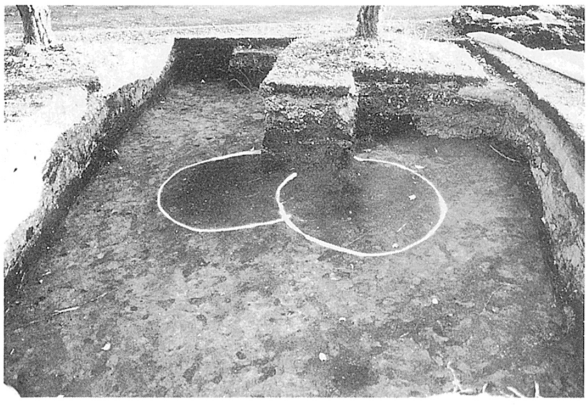
第５号土坑



第６号土坑



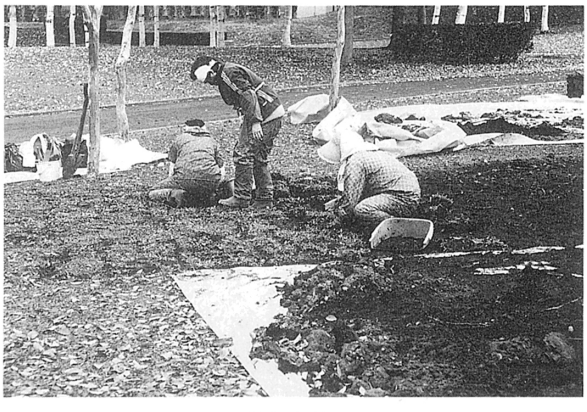
第８号土坑



第２・３号土坑確認

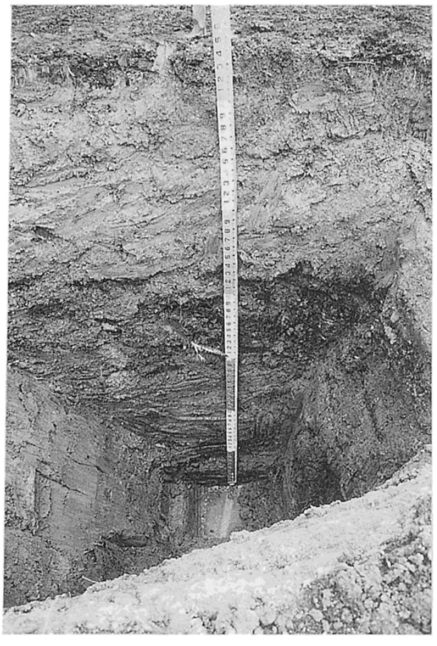
Ｂ区調査トレンチ

作業風景

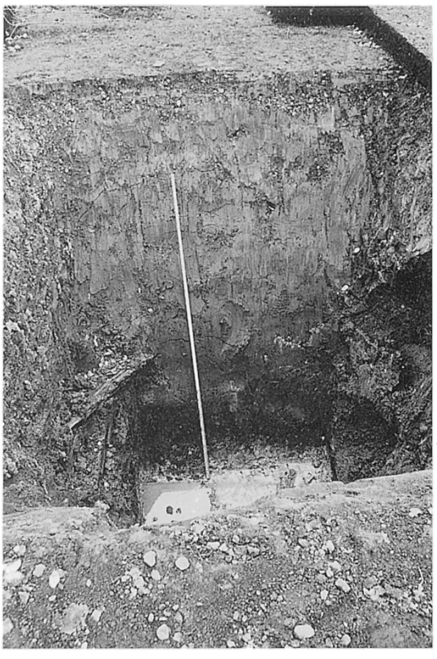


作業風景

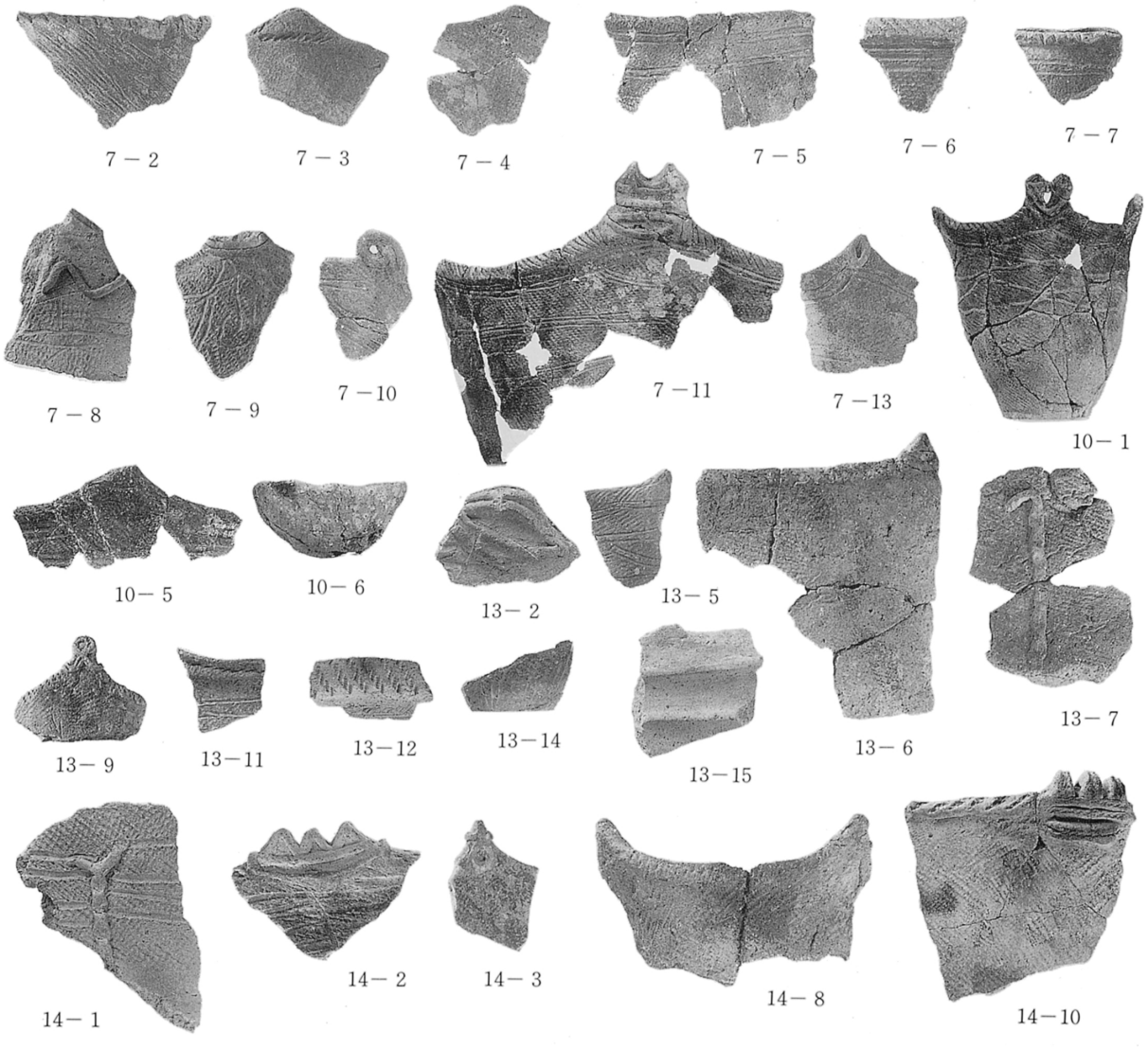
土坑・竪穴遺構・作業風景



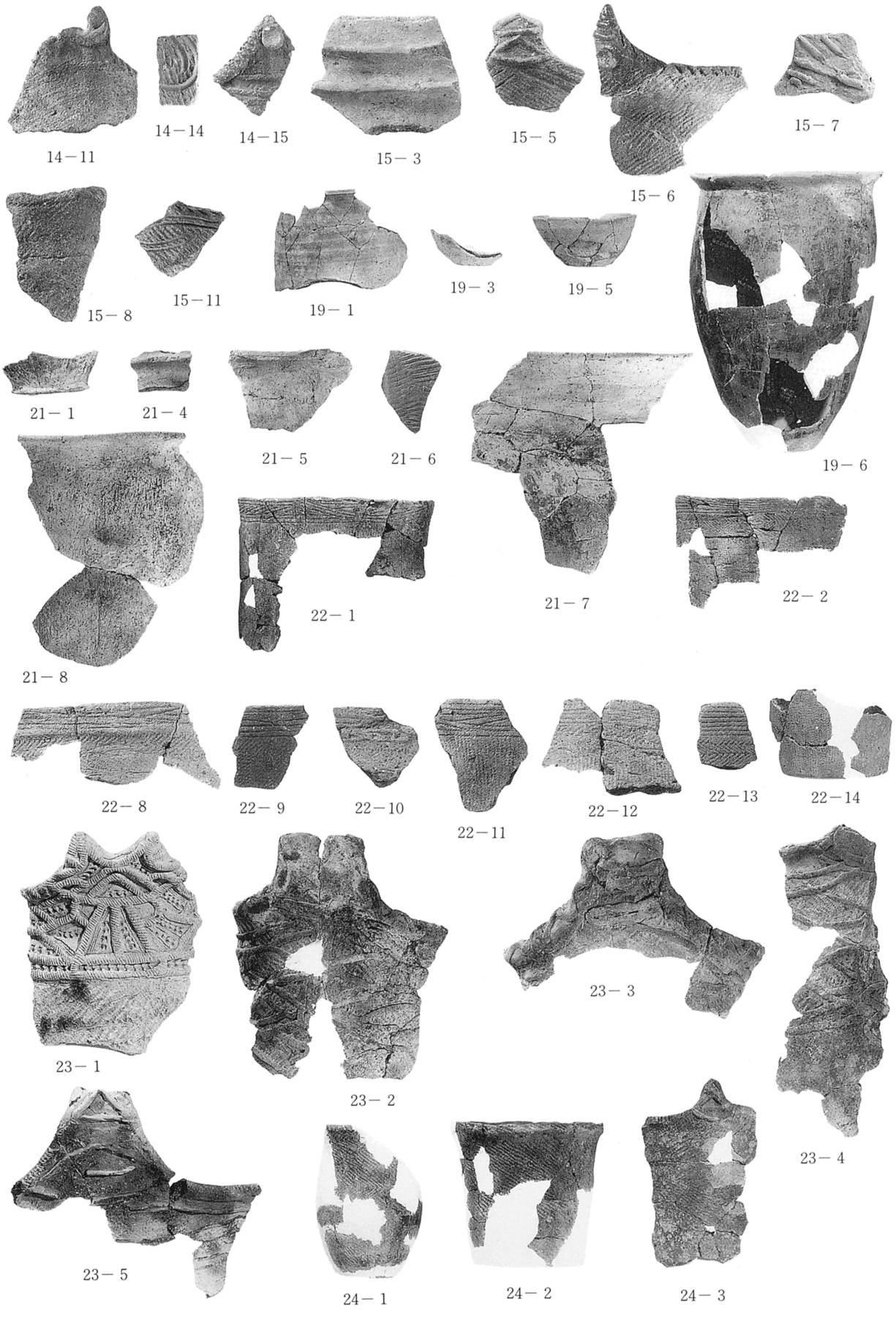
F区Pトレンチ



F区Hトレンチ



F区トレンチ・縄文時代の遺構出土遺物


14－11
14－14
14－15
15－3
15－5
15－6
15－7
15－8
15－11
19－1
19－3
19－5
19－6
21－1
21－4
21－5
21－6
21－7
21－8
22－1
22－2
22－8
22－9
22－10
22－11
22－12
22－13
22－14
23－1
23－2
23－3
23－4
23－5
24－1
24－2
24－3

出土遺物

24－4

24－5

24－6

24－7

24－8

24－9

24－10

24－11

24－12

24－13

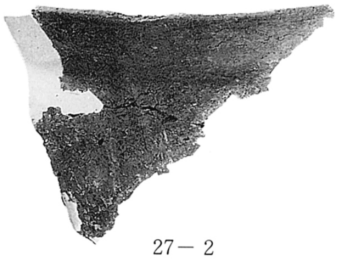
F－1

F－2

F－3

F－4

27－1


27－2

27－3

27－5

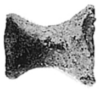
27－6

27－7

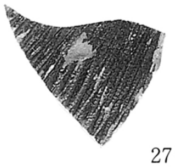
27－8

27－9

27－11


17－2

17－3


27－13

出土遺物

8－1

16－1

16－3

16－4

16－5

16－6

16－8

16－9

16－10

16－11

16－12

16－13

17－1

17－2

25－1

25－3

25－4

25－5

25－8

25－9

25－10

25－13

25－14

26－1

26－6

26－8

26－9

26－10

出土遺物

青森県埋蔵文化財調査報告書第216集

近野遺跡 V

－県総合運動公園拡張整備事業に伴う遺跡試掘調査報告－

発行年月日	1997年3月31日
発　　行	青森県教育委員会 〒030 青森市新町二丁目3－1
編　　集	青森県埋蔵文化財調査センター 〒038 青森市新城字天田内152－15 TEL　0177（88）5701
印　　刷	高金印刷株式会社 〒038 青森市千刈二丁目1－30 TEL　0177（81）0519・2244